
イフィム。人間の世界は化け物に満たされた

Aura

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イフィム。人間の世界は化け物に満たされた

【Nコード】

N2375X

【作者名】

Aura

【あらすじ】

突然現れた化け物は人間の生活を瞬く間に破壊した。

イフィムと名付けられた化け物に村を襲撃され、目の前で多くの知人を殺された永斗は復讐を果たすため、イフィムを討伐する手段を身につけるべく、幼馴染の椎名と防衛学校に通っていた。

超能力者椎名とその護衛永斗、二人の学園？ファンタジー。

ブログ（前書き）

初めての投稿です。

読みにくい点が多々あると思いますがよろしく願います。
週一の更新をめざします。

プロローグ

上津 かみつ　ながと 永斗は眼前に剣を構え、その後ろで藍東 あいとう　しいな 椎名は敵を見据える。

今二人の目の前にいるのは一体の化け物。形こそ狼の形をしているが、それは厳密に言えば生き物ですら無い。

全身をコールドタルの様な光沢のある黒色に塗られたそれには、目も鼻も存在しない。

ただ形が狼の形をとっているだけである。

人類はその化け物のことを便宜上イフイムと呼称した。

六十三年前に突然現れたイフイムは、決まった形を持たず、それぞれが現実存在する動物や昆虫、鳥などの形を真似てその姿を形作る。

今二人の目の前にいるのも、その一種類だ。イフイムは生まれる瞬間に、その環境に適した形を取る。人に捨てられたビル街のここでは、犬や猫などが多数生息している。おそらくイフイムはそれを真似たのだろう。

ビルとビルの間を俊敏に動く狼型のイフイムを、二人はようやく大通りの道まで引つ張り出したところだった。

「椎名、これで決めるぞ」

永斗が後ろの椎名に声を掛けた。

「うん、私…これ以上…走りたくない。絶対に決めよう！」

椎名もそれに強くうなづく。

二人はここまでイフイムを引つ張り出すのに、すでに一時間以上走り続けていた。

永斗の方にはまだ余裕が見れるが、椎名は限界に近い様子だ。額からは大粒の汗が流れている。

「俺があいつの動きを止めるから、その間に核を壊せ。核の位置は分かっているか？」

「うん、大丈夫。割と分かりやすい場所にあるよ。尻尾の付け根の部分」

「分かった」

イフィムは二人を警戒したまま様子を見ていた。隙あらば近くのビルに逃げ込もうとしている。しかしそれを分かっている二人は、視線をイフィムから離すことは決してしない。

永斗がイフィムとの距離を一步近づけるとイフィムが一步下がった。さらにもう一步。イフィムも同じように下がる。さらにもう一步。

しかし次の一步をイフィムは下がる事が出来なかった。いつの間にかイフィムの後ろに白色の壁が出来ているのだ。それに驚いたイフィムが視線を二人からそらした。その一瞬を永斗は見逃さない。一息に間合いを詰め、イフィムに切りかかる。

それに気づいたイフィムも横っ跳びに避けようとするが、すでに間に合わない。斬撃はイフィムの胴体を風いだ。そしてすぐに永斗はイフィムと距離を取る。

真っ二つに切られたイフィムはその場にドサツと崩れ落ちる。しかしこれでは終わらない。イフィムの切られた上半身は瞬く間に消滅していく。しかしそれに対するようにして、下半身は切られた位置から上半身が修復されていく。

イフィムに通常の攻撃は通用しない。どれだけ切っても、焼いても、すり潰しても必ず核結晶と呼ばれるイフィムの心臓部が残っている限り修復してしまう。そして核結晶は現代兵器では決して壊れない。

「今だ。修復中のあいつは無防備になる」

永斗の声に合わせるように、後ろに控えていた椎名が右手をイフィムに向けて付きだす。

その手のひらには、先ほどイフィムの後退を妨害した白色の壁と同じ色の球体が浮かんでいた。

「ライトショット！」

椎名の声と同時に球体はイフィムに向かって打ち出された。球体は

一直線にイフィムの尾の付け根を打ち抜く。

パリンッ！っとガラスの割れるような音が辺りに響いた。同時に今まで修復を進めていたイフィムの修復が止まる。そして上半身と同じように消滅していく。

イフィムの核結晶を破壊し完全に殺すことが出来るのは、超能力者の力だけだ。今の椎名の攻撃がそれだ。

超能力者は、イフィムが現れると同時に現れるようになった。彼らの力は、血のよって遺伝し、その能力は千差万別である。

椎名は超能力者の家系である藍東の血筋だ。その力は簡単に言えば光を操るものだ。

永斗はイフィムが完全に消滅すると、その場に残っている割れた核結晶を拾い上げる。

「これで終了だ。ライトショットもだいぶ精度が上がったな」

拾った欠片を持ってきたビンに入れながら、永斗は椎名に振り返る。

「今はお昼だからだいぶ制度が上げれるけど、やっぱり朝とか夕方は精度が落ちちゃう」

椎名はどこかしょんぼりとした表情を作る。

「それは練習で実力付けてくしかないんじゃないか？実際昔に比べれば、今のライトショットの威力もずいぶん上がったる」

「そっなんだけどね……」

椎名は永斗の言葉を聞いても尚も不満があるようだ。

超能力は血にのみ遺伝するが、その能力の強さはバラバラだ。藍東家の場合なら光を一度に操れる総量、どれぐらいの明るさなら光を操れるかの光量、操る光をどの様に操ることが出来るかの力量でその能力者の強さを測る基準としている。

最後の力量は練習しだいでいくらでも上げることが出来るが、前者二つは完全に先天的な才能だよりだ。椎名は、この総量と光量が、藍東の他の能力者に比べて明らかに劣っていた。

これ以上椎名が考え込まないようにするため、永斗は「それよりも」と話題を変えた。

「これで俺は二期生に上がれるんだっとな」

「やることはやったし大丈夫だと思うよ？先生もこの実習を無事に済ませれば上がらせてくれるみたいなこと言ってたし」

「なんで俺がこんな面倒なことしなくちゃいけないんだ……」

永斗の呟きに椎名がジト目になる。

「永斗が変にサボったりしなければ、もっと早いうちに二期生になれたと思うよ」

その言葉には呆れが多分に含まれている。それを聞いて永斗は「うつ……」と言葉を詰まらせた。

「だいたい実技だけじゃ二期生になれないの分かったのに、全然実習に参加しなかったのは永斗でしょ？それ以前に一般教科のテストだって……」

椎名の説教口調に、永斗は話題の選択を誤ったことをいまさらながらに気づいた。しかし、時すでに遅し。説教を開始した椎名を止める人物は、ここにはいないのだ。

運動用に戻りに束ねた藍色の髪をなびかせつつ、椎名の説教は続く。永斗はビンに入れた核結晶の欠片を眺めながらただ説教を聞き流すことしかできなかった。

一章

実習を終え、二人は街に戻って来ていた。

二人が暮らしている街は、早い時期からイフィムとの交戦を避け、守りに重点を置いていた町の一つで、被害が少なかった。

そのため現在では貴重な大都市の一つとして大きく繁栄している。

二人はこの街にある、第六防衛学校の生徒だ。

この正式名称『連立防衛高等学校第六分校』は能力者の出現後、イフィムに対抗する人材を育てるために国際連合によって設立された学校であり、現在第一校から第十三校までが世界各国に存在する。日本に存在するのは、二人の通っている第六防衛学校だけである。防衛学校には二つの学科が存在する。

一つは椎名の所属する能力者育成科、通称能育科である。

能育科は、椎名の様な能力者専門の学科であり、当然教師も全員が能力者である。

能力者はここで三年間勉強し、自分の能力や、イフィムの特性を知ることによって戦うすべを身につける。

能育科が出来る前は、イフィムとの戦闘で死亡する能力者が後を絶たなかったが、能育科が設立以来、その数は劇的に減少した。

そのことから能育科の重要性は証明できる。

そして防衛学校のもう一つの学科が、永斗が所属している護衛科である。

護衛科は能力者のサポートを専門とする、職業『ガーディアン』を目指す者たちが通っている。

ガーディアンは、この防衛学校の卒業試験に合格することで、初めて名乗ることが出来る特別な職業だ。

彼らは、能力者がイフィムを討伐する際に同行し、サポートを行う。護衛科では、イフィムの特徴や特性だけでなく、能力者の種類や、その超能力についても勉強する。

そうすることで、能力者がイフィムと戦う際に最大限のサポートを行えるように勉強するのだ。

そしてこの護衛科には、普通の学校とは違った進級制度がもつけられている。

期生進級制度と呼ばれるもので、一期から三期までを在学年数に係なく、一定の条件をクリアし、自身の能力を証明することで進級することが出来る制度だ。

これは現状のガーディアン不足と、ガーディアンの能力を維持するための処置である。

永斗と椎名は護衛科の校舎と能育科の校舎のちょうど間に存在する、実習受付所に来ていた。

いつもは、人が多く並んでいる受付も、春休み、それも最終日ともなれば空いていた。

二人は受付に行くとかウンターに座っている女性に声を掛ける。

「すみません。実習の終了を報告に来ました」

「はい、では依頼書と核結晶の提出をお願いします」

女性はなれた手つきで、一枚の用紙を取り出しながら言う。

「あと、こちらに必要事項の記入をお願いします」

渡された用紙には、依頼完了確認書と書いてある。

永斗は指示に従い確認書に記入をすませ、実習を受ける際に渡された依頼書と、イフィムを倒した際に回収した核結晶を確認書と共に提出する。

実習は実際に企業や個人から出された、イフィムの討伐依頼の中で学校側が危険度の低いものを選別し、生徒たちに行わせている。

そのため実際に成功報酬も発生する。防衛学校ではこれが生徒のお小遣いとなっている。

「はい、確認しました。報酬は指定の口座に振り込まれます。それと永斗さんはこの後、護衛科の職員室に行ってください。^{ながれ}流先生が進級証明書を持って待っているはずです」

「わかりました。ありがとうございます」

「よかったね。何とか二年目までには二期生になれて」

「全くだ。危うく二年目で一人だけの一期生になるところだった」

そう言いながら二人は受付を離れ、そのままの足で言われた通り職員室へ向かう。

職員室に入ると、永斗のクラスの担当教師、鈴原すずはら流ながれを探す。

流は職員室に設置されているコーヒーマシーンの前でタバコを吸っていた。

「流先生」

永斗は近づきながら声を掛ける。

「やあ永斗君。実習が終わったようだね」

流は生徒に人気の高い教師だ。授業の教え方がうまく、ガーディアンとしての実力もある。しかし最も生徒の人気を集めている理由は、おそらくその穏やかな性格からだろう。

体育会系の熱血教師が多い護衛科は、流ほど落ち着いて話せる教師は皆無に等しい。

その面が流の人気を押し上げていた。

「ああ、予想以上に時間がかかった。あんな逃げ腰のイフィム久しぶりだ」

「これでも十分早いと思うけどね。僕の予想だと夕方ごろになるものだと思ってたよ。それぐらい難しめの依頼だったから」

「そんなに時間掛けられてたまるか。俺は面倒くさいのが嫌いなんだ」

「そんなこと言ってるから、二期生になるのが最後になるんだよ」

流は苦笑しながらタバコを消して、自分の机に戻る。永斗と椎名もそれに続いた。

「とりあえず、指定の実習を終了させたことだしね。これが約束の進級証明書だよ」

「ありがとうございます」

「それとこれが二期生証明書。実習の依頼を受ける時はこれを出さ

ないと、二期生が受けられる実習を受けることは出来ないから気をつけて」

渡されたカードには永斗の持っている一期生証明書（裏面が黄色）の二期生バージョン（裏面が白）だ。

証明書には学生の個人情報が入力されたICチップ内蔵されており、そのまま学生証としての意味を持っている。

永斗は受けとった証明書を胸ポケットにしまうと、職員室を出て行くとする。

そこに後ろから声をかけられた。

「三期に上がるには一般科目も評価対象に含まれるからペーパーテストの勉強も怠らずにね。実技はいいんだからもったいないよ」

「肝に銘じときます」

永斗はそれだけ言うつと職員室を出た。椎名はそのあとに一礼して永斗の後に続く。

職員室を出たところで今まで静かにしていた椎名が話しかけてきた。

「永斗、いつも流先生には冷たいよね？」

「ああ、どうもあの先生は信用できないんだよ……あの笑い顔に何か隠してそうな気がして。まだ体育会系教師のほうが、感情をストレートに出してくる分信用できる」

「普通にやさしい先生だと思うけどな」

「そんなことより昼飯いかないか？今日ならもう学食も始まつてるはずだし」

時間はすでに午後の2時を回っている。早朝からイフィムの討伐に走り回って永斗の空腹は限界に達していた。

「そうだね。今日なら新年度の新メニューが出てるかも」

「一年の時はなんだったっけ？」

「確か鶏肉のオレンジ煮だった気がする」

「ああ、あの強烈に不味かったやつか」

「えー、結構美味しかったよ」

新年度に毎年、防衛学校の学食は新入生歓迎記念として、オリジナ

ルメニューを出している。去年、永斗達の入学記念メニューが鶏肉のオレンジ煮だった。

その強烈なオレンジの匂いと酸味に鶏肉の油が染み出て、想像を絶する不味さだったため、学生のみならず教員からもクレームが来ていたのを思い出した。

ただ一人椎名だけがオレンジ煮を美味しいと言いながら食べていたが……

「今年はどんな料理が来るのかな？」

「せめて食える物を出してほしいもんだな」

二人が学食へ向かうため廊下を歩いていると、見知った顔があつた。椎名と同期の佐々木^{ささき} 文美^{あやみ}と永斗の同期の星野^{ほしの} 幸也^{しゅんや}だ。まだこちらには気づいていない様子で、二人で何か話し合っている。

「文美、ついでに幸也」

永斗の呼びかけに二人が気づく。

「永斗君。ついではひどくないかな？」

「椎名に永斗じゃない。どうしたの？こんな春休み最終日に」

文美のおまけ扱いに、幸也が不満を上げるが、それはあっけなく文美によってスルーされた。

「永斗の昇級のために朝から実習に行ってたの。さつき戻ってきて二期生証明書もらってきたところ」

「まだ上がってなかったの！」

幸也が椎名の発言に驚きの声を上げる。

「そうなんだよ。永斗ったら実技試験は問題ないのに、出かけるのが面倒臭いとか言つて全く実習に出なかったの。そのせいで二期生に上がるための評価点が全然足りなかったんだよ！おかげで春休み中、実習のオンパレード！」

「まさか二週間で六回も討伐に出るとは思わなかったな」

永斗のしみじみとした声に文美があきれ、幸也が呆然とした。

基本的に実習は二週間に一回行けば良いほうで、一週間置きで行くのは、実戦の疲れや緊張も考えるとかなり危険と言われていた。

「椎名がよくそんなハードワークに耐えれたわね。正直私でも厳しいわよ」

「ほとんど永斗がやってくれたから。私は永斗の後ろで、最後に核結晶を破壊したただけだもん。今日はさすがに走り回って疲れたけど……」

「じゃあ何？永斗君はほぼ一人で二週間に六回の実戦をこなしたってこと？」

「小型なんだし問題ないだろ。なればお前でも十分できる。さすがに中型や大型が来ると厳しいがな」

「いや、無理だから……」

永斗が当たり前のように常識はずれなことを言うので、幸也はあきれ果てる。

「それより、俺たちこれから学食行くんだが。二人も行かないか？」

「今日なら新年度メニュー出てるかもしれないし。私、結構楽しみなんだ」

その言葉を聞いて、二人がそろって苦虫を噛み潰した様な表情になる。去年の新年度メニューを思い出しているのだろう。二人にも鶏肉のオレンジ煮はトラウマになっているようだ。

結局永斗達は四人で学食に来ていた。

椎名はうきうきしながら学食前に張り出されているメニュー表を覗く。それを横から三人が祈るように見る。

「今年は唐揚げの餡かけだって」

「あれ？それいつももあるやつじゃない？」

椎名の言葉を聞いて、文美が問う。

学食には一品でいろいろなバリエーションを出すため、唐揚げだけでも普通のと餡かけ、ソース、みぞれなど豊富な味付けがある。

「えっとね。普通の餡かけはいつも通りあるんだけど、新年度メニューとして一工夫してあるらしいよ」

その言葉に三人がホッとす。既存の物に一工夫するだけなら去年

よりひどいものは出てこないだろうという考えだ。

「なら全員それにしてみるか？」

「いいんじゃない。他の奴ってほとんど食べ飽きちゃってるし」

「そうだね」

永斗の提案に他の二人も賛同した。

「ふう。美味しかったね」

とは椎名の感想だ。あとの三人の感想は

「……」

沈黙が料理の味を物語っていた。その後四人で同じものを注文した
は良いが、料理を無事に全て食べたのは椎名一人だった。

「どうして餡が苦くなってるんだ……」

「この刻んであるのってゴーヤよね？」

「こつちのは多分高麗ニンジンだね。ほかに山菜が結構入ってる。
全部苦味が強いものばかりだけど」

出された唐揚げの餡かけは餡が激苦使用になっていた。

「辛いとか甘いとかならまだ分かるが、何で苦みを採用したんだ、

この学食は！これ完全な嫌がらせだろ！」

「今年も苦情がわんさか来そうね」

「なんで椎名さんはこんなに苦いものを平然と食べられるのかな？」

「……」

「椎名は極度の味覚音痴だ。あいつは何食っても上手いしか言わな
い」

「それって幸せなことなのかしらね？」

「俺が知るか。ただ言えるのが椎名に料理は作らせない方がいい。
味が分かって無いからな。どんなもんが来るか分からんぞ」

「肝に銘じておくわ」

三人が満足そうな椎名の表情を横目に、ひそひそと話していると、
それに気づいた椎名が割って入ってきた。

「なに？何の話？」

「自分たちの食文化を守ろうって話だ」

「ふーん。変なこと話してるんだね」

自分たちの気も知らないでと、三人が心の中で憤慨しているが、椎名はそれに気づくことも無く、それよりも話を続けた。

「さつき幸也君、永斗の昇格にまだ上がって無かったのって驚いてたよね？普通はどれくらいで上がるものなの？」

「私も気になる」と文美も椎名の疑問に乗る

理屈では護衛科の制度のことを分かっているにも実際に経験してみないと分からない。それが護衛科の昇級制度である。

一般的な三年で卒業出来る能育科ではなかなか感覚がつかめないのだろう。

「一般的なのはちよつと分からないけど、僕は入って半年で上がったかな。それが一番早かったみたい。他の子もだいたい冬休み中には二期生に上がってると思うよ。それ以外の子は、実際にイフィムと戦ってみて、その後に実戦の恐怖とか実力不足とかを痛感して二期生になる前に辞めちゃう子が多いんだろうけど」

「そうなんだ。じゃあ永斗はよっぽど珍しい部類だったんだね」

「そうだね。永斗君のことは先生もかなり悩んだよ。なんてったって実技試験はトップで合格してるのに、実習に行かないせいで一期生のままになりそうだったんだからね」

「なんで永斗は実習行かなかったの？」

「害が出てないイフィムなんか倒しても意味が無いだろ。今日のなんか人間から完全に逃げてたし。そんなのを殺しても時間の無駄だ」
文美の予想通りの質問にノータイムで答える

「でも被害が出てからじゃ遅いんじゃないかな？」

永斗の答えに幸也が、当然浮かんでくるであろう疑問を返す。

「実習でガーディアンの卵なんかに討伐されるようなイフィムじゃ、人間に被害なんか出せない。イフィムに襲われたって例は、自分たちからイフィムのいるところに入り込んでた結果だ。大半が交通に邪魔だとか、仕事の邪魔になるとか、人間の都合がほとんどなん

だよ」

「よく知ってるね。そんなことガーディアンでも能力者でも知ってる人少ないんじゃない？」

「椎名の母さんからの受け売りだ。別に俺が気づいた訳じゃない」

「椎名のお母さんって、確か元ガーディアンで永斗のお師匠様だった人だよな？」

「そうだよ。お母さんすつごく強かったんだから！」

自分の母親の話になると、椎名が少し恥ずかしそうにしながらも嬉しそうに話す。

「かなり厳しい人だったけどな。俺は弟子になってからかなり厳しくしこかれた。何回か実戦にも連れていかれたしな」

永斗が微妙に遠い目になる。それを見て椎名が苦笑。

「死に物狂いで逃げ回ってたってお母さん笑いながら言ってたよ」

「笑い事じゃねえ！まだ剣もまともに触れなかった時期だぞ。そんなガキをBランクの依頼に連れてく方が間違ってる！」

イフィム討伐の依頼の困難度、危険度を分かりやすく示すものに依頼ランクが存在する。

永斗達ガーディアンが学校から受けてくる依頼はDランクやCランクがほとんどだ。二期生になればBランクも受けれるようになり、Aランクを受けるには三期生になる必要がある。Sランクも存在するはするが、ほとんど依頼が発生することは無く、危険すぎるため正式なガーディアン出ないと依頼を受けることは出来ない。

Dランクはイフィムとして活動を開始していない。いわば卵状態のイフィムを討伐する依頼だ。卵状態のイフィムはその中で成長し、時間に比例して小型から中型、大型へと進化する。卵の内に倒すのは被害を出さない方法としては一番重要だと言われている。

Cランクになると小型のイフィムが主な討伐内容になる。小型の基準は自転車くらいまでの大きさが小型とされ、そこまで凶暴性はない。ガーディアンのお卵の実習にはうってつけた。

午前中に永斗たちが行っていた依頼がちょうどCランクに当たる。

Bランクになると内容に中型のイフィムが混じるようになる。小型の場合でも稀に現れる凶暴な個体はBランクに含まれるようになる。その後Aが大型Sは特殊型が主な依頼内容になる。

永斗は剣もまともに振れないうちから、Bランク依頼つまり中型のイフィムや凶暴な小型イフィムを討伐するのにつれて行かれていた。はたから見れば無謀もいところだが、それを生き残ったからこそ、永斗は実戦において学生からは想像もできない行為も出来るようになってるのだ。

「確かに子供のころからそんな所で訓練してれば、二週間に六回なんて無茶も簡単に出来るようになるかもね」

「幸也安心しなさい。家はそんなスパルタな依頼は出さないから」

「それは心強いね。文美ちゃんがそう言ってくれるなら安心だ」

「なんだ、幸也は文美の専属で決定なのか？」

「そういえば言ってたなかったね。春休み中に正式に文美専属のガーディアン（まだ卵だけど）に決まったんだ」

「二期生への昇格が同期の中で一番だったのが評価に結び付いたみたいね。これで私も気兼ねなく幸也を同行させられるわ」

ガーディアンを雇用する際には大きく分けて二つの方法がある。

一つは防衛学校を卒業後、フリーのガーディアンとして斡旋所に登録し、能力者を紹介してもらう形だ。大半の人はこれに属する。

もう一つが文美たちの様に能力者専属のガーディアンになることだ。これは大半が家や血筋で決められることが多い。幸也の星野家は、能力者が現れてから代々文美の家系、笹木家のガーディアンとして使えてきた。

「じゃあこれで堂々と二人は付き合ってますって言えるね」

椎名の発言に、文美が残念そうな表情をしながら首を横に振った。

「それはまだダメなのよ。実力は認められたけど、正規のガーディアンとして登録されるまでは、本家に知られる訳にはいかないわ」

「やっぱり本家としてはエクスガーディアンが欲しいみたいだからね。契約しても能力が使えるかどうか分からない相手とは、交際

は認めてくれないと思う」

椎名は契約という言葉に一瞬ピクツと反応するが、文美と幸也には気づかれなかったようだ。

「契約は一発勝負だからな。どうしても慎重になるのは仕方のないことだろ」

契約とは能力者と一般人（ほとんどがガーディアン）で結ばれる特別な繋がりのことだ。

能力者はその一生のうちに一人だけに対し契約を結ぶことが出来る。これをする事で、契約した人は、能力者をその一生を掛けて守ることに引き換えに、能力者から少しだけその力を分けてもらうことが出来るのだ。

ただし、全ての人が契約すれば能力を使えるようになるという物ではない。詳しくは未だに説明されていないが、お互いの波長の様なものが合わないと、契約しても能力を使えるようになることは無いのだ。

そしてExclusive エクスクルーシブ guardian ガーディアン、通称エクスガーデ

イアンとはそんな能力者と契約を交わし、超能力を使えるようになったガーディアンのことを示す。

エクスガーディアンは世界的に見ても非常に貴重で、国連に確認されているだけでは30人にも満たない。

そしてその全てが、その名の通り契約した能力者の専属ガーディアンになっている。

単騎でイフィムと戦うことのできるガーディアンが、イフィムを滅ぼすことも出来るようになるのだ。一族の血を絶やしたくないどの家系でも、喉から手が出るほど欲しい存在だろう。

ちなみに、ほとんど契約が男女間でなされており、契約を結ぶこと＝結婚と一般的には解釈されていたりもする。椎名の母親も能力を使うことは出来なかったが、椎名の父親と契約は交わしている。

「そうゆうことよ。契約のシステムが解明されればこんなことで悩む必要は無くなるんだろうけど」

「それはそれで政略結婚とか流行りそうで嫌だよ」

文美の言葉に椎名が顔をしかめる。それに　と椎名は言葉を続ける。

「契約のことって多分、科学じゃ解明されない気がするんだよね。契約する人同士の気持ちの問題とかが大きいと思うんだ」

「椎名はずいぶんロマンチストね」

「そんなこと無いよ。ただなんとなくそう思っただけ」

椎名はなぜか恥ずかしそうに指をもじもじとしながら言う。

「そう言えば何で文美たちは今日ここ来てたんだ？俺たちみたいに実習に行ってたわけじゃないんだろ？」

「当たり前よ！」

「僕たちは先生に呼ばれたんだよ。明日の新入生入学式のための打ち合わせ」

入学式という言葉に、永斗は記憶の中に微かに残っていたものを引っ張り出そうと試みる。

「えっと……」

しかしどれほど思い出そうとしても、自分の入学式の時の様子が全く浮かび上がってこない。その理由は椎名が端的に述べた。

「永斗、入学式始まって少ししたら寝ちゃってたじゃん」

「はは、それは永斗君らしいね。入学式の時に能育科から一人と護衛科から一人、二期生の誰かが円舞を披露するんだよ。それに僕たちが選ばれたんだ」

それを聞いて永斗の記憶に引っ掛かるものを見つけた。

「そう言えば騒がしくて一瞬起きた時にそんなの見たな。ずいぶんレベルが低かった気がするが」

「そりゃ子供のころからイフィムに追いかけまわされて育った子に比べたらレベル低いだろうけど……」

幸也は呆れ気味に呟く。

「俺をジャングルで育った野性児みたいに言うな！」

「去年の代表は、今三期生の成績トップよ。それをレベル低いだな

んで、ずいぶんなこと言うのね。先輩に聞かれたら大変なことになるわよ」

「そうだよ。変な問題起こすと三期生にあがるのも遅れるよ？」

二期生になるのさえ最後だったのだ。問題なんて起こした日には、教師の評価で決まる昇給は、一年先になるか二年先になるか分からなくなる。

「めんどくせえ……」

「そんなこと言ってるって椎名に捨てられるわよ」

「私はそんなことしないよ！」

椎名の突然の大声が学食に響き渡る。生徒が少ない分余計響いた。食堂にいた少ない生徒は全員が聞こえただろう。

「はうつ！」

自分の出した声に恥ずかしくなり、椎名は顔を真っ赤にしながらかさくなった。

言われた文美も少し赤くなっている。

「まさかそこまで強く言われるとは思わなかったわ」

「ううう……」

「永斗君愛されてるね」

幸也から話を振られた永斗は「ふんっ」とそっぽを向きながらも耳が赤くなっていた。

その後は文美が椎名を中心にいじりながら昼食を終え、文美たちが円舞の練習があるからと二人と別れ、その後、永斗と椎名も流れるに解散になった。

学生寮の自室に戻ってきた永斗はベッドに横になる。

午前中にイフィムを追いかけて走りまわっていたのが予想以上に体に響いているようだ。

その程度で動けなくなるようなやわな鍛え方はしていないが、連日の実習の疲れがたまっていたのだろう。そのまま眠りについた。

二章

真つ赤に燃えあがる家々。

逃げまどう人々は、次々と襲いかかってくるイフィムになすすべもなく殺されていった。

少年は、それを部屋の中から、ただ見ていることしかできなかった。傍らには幼馴染の少女が、怯えながら少年の腕にしがみついている。少年は、少しでも少女の恐怖をやわらげようと、声を掛ける。

「大丈夫だから。今にお父さん達がいっつらをやっつけてくれる」「うん」

少年の視線の先には、次の獲物を探すイフィムの姿。二人の姿は窓の陰に隠され、イフィムはその存在をまだ感知していない。しかし迫る火の手とイフィムの群れは、少年たちを確実に追い詰めていた。そしてその時は来た。

火の手はとうとう二人の隠れている家にまで達し、部屋に煙が充満する。

今外に出れば火の手からは逃れることは出来るだろうが、外のイフィムの餌食になるだけだ。

二人はなるべく低く屈み、ただじっと両親が助けにきてくれるのを待つことしかできない。

しかし煙の勢いは強く、時期に少年たちを飲み込んだ。

酷く咳き込む。

その音は外のイフィムにも届いた。届いてしまった。

家の壁が破壊され、獲物を見つけたカマキリの形をしたイフィムが部屋の中に侵入してくる。

二人の全身に恐怖が走り、汗が噴き出す。

小さい部屋の中、少年は少女を引っ張り振るわれる鋭いカマを必死の思いでかわす。

だが所詮子供の体力。逃げ続けることなど到底不可能だった。

イフィムの一振りが少女の肩口を裂いた。

恐怖で出なかった少女の声が、痛みで一斉に飛び出す。

辺りに響き渡る少女の悲鳴に、外で獲物を探していた他のイフィムまでもが集まってきた。

その場で倒れこむ少女を支えるため、少年は少女の体を引き寄せるが、少女の勢いに負けて一緒に倒れてしまう。少年は床に、少女はその上に覆いかぶさるように倒れた。

そして少年の目に映るのは、少女の背後から今振り下ろされようとしているイフィムの腕。

そして無情にもその腕は振り下ろされ、少女の体を……

・

・

・

そこで永斗は目を覚ました。

全身を汗でぐつしよりと濡らし、酷く呼吸が乱れていた。

外はすでに真つ暗で、時計を見ればすでに夜の十時を回っている。

「契約なんて言葉聞いたからこんな夢見たのか……」

乱れた呼吸を整えながら独りごちる。

その後、生き延びた二人は自力で村を脱出し、森の入口で椎名の母親と合流することで、なんとか助かることができた。

夢は永斗がガーディアンを目指す原因になった事件だ。

当時、永斗と椎名が暮らしていた村を突然イフィムの群れが襲ったのだ。

村に一人だけいた能力者である椎名の父と、そのガーディアンである椎名の母は必死に応戦したが、いかんせんイフィムの数が多すぎた。すぐに村の中までイフィムの侵入を許してしまう。

村の大人たちも必死に抵抗したが、ガーディアンでもましてや能力者でも無い一般人が何をしようと、イフィムには無意味だった。

村に入り込んだイフィムは家を襲撃し、中に隠れていた人たちを次々と殺していった。

そのうち一件の家に火の手が上がり、それはあっという間に村全体に広がってゆく。

もはや村の壊滅を止める手立ては、誰にも残されていなかった。

永斗の両親は、永斗を椎名の元に行くように言ったあと、過去に護衛学校に通っていた経験を生かし、永斗の母は村人の生き残りを助けに他の家を掛け周り、父もそれに続いた。

後は夢で見た光景だ。

一夜開け、イフィムは破壊の限りを尽くし退散していった。

生き残ったのは椎名と永斗、椎名の母と永斗の母、そして村人が数名だけだった。

その村人も、運良く森の中に山菜を取りに行っていて、襲撃時に村にいなかった人達で、実質村から無事に逃げ伸びたのは、永斗達四人だけだった。

幼い日のトラウマを振りはらうべく、ガーディアンとしての訓練がむしゃらに積んできたが、未だにその根は断ち切られていない。

汗で肌に張り付いた服を脱ぎ、洗濯機に放り込むとそのままシャワーを浴びた。

冷たく設定したシャワーが火照った体を冷ましてゆく。

「俺はまだ吹っ切れて無かったのか」

永斗の呟きにはもちろん返事は帰ってこない。

シャワーを出ると自分が空腹なのに気づいた。

寝たのは四時ごろ。ざっと五時間は寝てしまったことになる。その間にはもちろん夕食の時間が含まれている。

永斗の暮らす柵寮では、食事は寮の食堂です。そのため各自の部屋には台所が無い。

食堂の使用時間は、夜は八時までと決まっておりますに閉まっている。

だがそこは学生寮。若い生徒の中には、当然夜中に腹が減る者もいる。

そこで彼らは、自らの部屋に夜食を取るための電気ポットを持ちこ

んでいる。もちろん永斗もだ。

永斗は、買い置きしておいたカップ麺を開け、湯を注ぐ。すぐに美味そうな匂いが部屋を満たした。

指定された待ち時間を待ち、永斗が食べよとした時、部屋の扉がノックされた。

そして永斗の返事を待たずに扉が開かれる。

「よう永斗。今日晩飯ん時いなかったけどどうかしたのか？お、なんか美味そうなもん食ってるな」

ずかずかと部屋に入ってきたのは隣部屋に住んでいる堀田 純一だ。ほりた じゅんいち
純一も防衛学校護衛科の生徒で、永斗より二年先に入学して来た、現三期生の生徒だ。

後輩の面倒見がよく、その気さくで威張らない性格から人気が高い。幸也の様に、特定の能力者に付くのではなく、完全にフリーで依頼を受けているのも人気の秘訣だろう。

「いきなりですな先輩」

「そりや去年入ってきた生徒の中で、一人だけ今年まで一期生のやつが、学校から帰ってくるなり部屋に引きこもって晩飯も取らないんじゃ、先輩として心配になるってもんだ」

「悪いがもう一期生じゃない。今日二期生に昇格した」

「なに！？お前の実習記録だと一年の内に二期生に上がるのは、ほぼ無理だと思ってたんだが」

純一が永斗の言葉に大げさに驚いたふりをする。

「おい、なんで先輩が俺の実習記録を知ってるんだ！」

「そんなもの、お前と同期の女の子に聞けば簡単に分かる！」

当たり前だと言わんばかりに胸を張る純一を永斗はジトッと睨みつける。

「また後輩に手を出したのか？」

「違うな。俺は手を出したんじゃない。向こうから差しのべられた手を取ったにすぎんよ」

「そつゆうのを屁理屈と言うんだ」

純一はその持前の容姿と性格でよく護衛科のみならず能育科の生徒からも好意を寄せられている。そしてその好意を快く受けてしまうのだ。

「よく薫先輩かあるに捕まりませんでしたね。いつもなら速攻で捕まって連行されているのに」

薫先輩とは純一の彼女のことだ。同じ護衛科の生徒で、純一とはもう三年も付き合っている。純一が他の女の子に手を出そうとするたびに、どこからともなく現れて純一を縛り上げ連れさる姿がよく目撃される。

その後は、薫の部屋から鞭の音が聞こえてくるとの噂だ。だが実際に部屋の中で何が起きているのかは当事者の二人しか知らない。

「俺だって学習しているのさ。薫はどこからともなく現れているわけじゃない。それに物理法則を捻じ曲げることも出来ない。ならばと俺は考えた。薫が物理的に俺に手出しできない時に誘えば良いんだと！」

純一の後ろでドドーンと効果音が聞こえるようなほど自信満々に言いきった。

「で、今回は薫が学校の掃除当番で教室に残ってる間に声を掛けたのさ」

自信満々に言っているがかなりダメな人の発言である。

「なるほど。そう言うことでしたか」

今度は純一の後ろから声がした。

その声に純一は固まる。

永斗は純一が熱心に語っている間に、部屋に入ってくるもう一人の人影を見ていたが、それをあえて見なかったことにした。

その女性が知り合いであり、かつ異様なほど黒いオーラをまとっていたからだ。

そのオーラが永斗の危機意識を刺激し、関わらないことを選択させた。

「さて、今日の折檻はどうでしょうねえ。この前は蠟燭でしたか

「ら今度は木馬なんか良いかもしれませんねえ」

木馬がどんな形の物かは想像したくない。

純一はすでに荒縄によって簀巻すまききにされていた。目にもとまらぬ早業である。

「永斗君、純一が迷惑掛けたわね」

「いえ、僕もちょうど暇してたところですから。薫先輩も大変ですね」

異様なオーラの持ち主。純一の彼女である薫がにつこりとほほ笑む。
「ありがとうございます永斗君。じゃあ私はこれ連れて行きますね。おやすみなさい」

「ええ。おやすみなさい」

薫が簀巻きの純一を引きずりながら部屋を出て行った。
扉が完全に閉まるのを確認すると、溜息をつく。

「……薫先輩こわかったな。にしても純一先輩何がしたかったんだ？」

語るだけ語って捕縛されていた先輩の意図が全くつかめない。

「まあいいか」

永斗は伸び始めたカップ麺を一気に平らげると再び布団に入った。

護衛学校に入学式はあっても、それは新入生のためのものであつて在校生には全く関係ない。

そして在校生は初日から平常授業である。

だが流石に、クラス替えや教室の変更などもあつて、いつもよりは早く登校しなければならない。

永斗もそれに従い、三十分ほど早く登校してきていた。

校門まで来ると昇降口の周りに人だかりが見えた。永斗のよく知った人影もちらほらと混じって見える。そこに新しいクラスが張り出されているようだ。

昇降口に近づくと、永斗に気づいた知り合いが声を掛けてきた。

幸也だ。すでに人垣の中から出てきたところを見ると、自分のクラスは確認し終えたのだろう。

「おはよう永斗君」

「ああ、おはよう。もうクラスは確認したかの？」

「うん。去年と同じ二組に入ってた」

「俺のクラスって分かる？あの人垣の中に入って行きたくは無いいんだけど」

永斗の視線の先には、クラス編成の張り紙を中心として半円状の強固な人垣。

全二年生が書かれた張り紙を遠くから見て、自分のクラスを確認するのは不可能だろう。かといって人垣の中に分け入ろうとすれば、朝からもみくちゃにされるのは目に見えていた。

「うん。そう言うと思って確認しておいた。同じ二組だったからすぐに見つかったしね」

「そうか悪いな。今年一年もよろしく頼むよ」

「こちらこそ」

二人は新しく一年を過ごす教室に来た。

二年の教室は一年のころより、一階下になる。

一年生が四階。二年生が三階。三年生が二階と順々に下がり、そのご四年以降は一階でまとめられる。

最初は出席番号順に座らされるのが普通だ。それは防衛学校も変わらず、永斗は左から二列目の前から二つ目。幸也は真ん中の列の前から四つ目。すこし席が離れてしまった。

すでに教室に入って来ている生徒にも、何人が顔なじみがいた。彼らと軽く挨拶を交わし、自分の席で荷物の整理をしていると、準備を整えた幸也が寄ってきた。

「今回のクラスはあんまり変わり映えがしないね」

「それはしょうがないだろ。二年までに二期生に上がれなかった連

中の大半は、春休み中に止めちまう。生徒総数が少なくなれば嫌でも同じクラスになる奴らは多くなるさ」

「それもそうだね。そういえば二年生からは実技の時間が午後の授業全てになるから、クラスはあんまり関係なくなるのかな？」

一年生のころは一般の学校と変わらない程度には一般教科の授業があり、実技の訓練時間は体育の時間を少し多くした程度だった。

しかし、二年生になると本格的に実技訓練の時間が設けられる。それは午後を丸々使ったもので、決して体育の延長と呼べるような代物ではないとの話しだ。

永斗はこの実技訓練に少なからず期待していた。

これまでの体育の延長程度では基礎トレーニングばかりで、すでに実戦経験で修羅場を体験し、実際のガーディアンである椎名の母に弟子入りして訓練してきた永斗にとっては生ぬるいものだった。

それではせっかく護衛科に入ってきた意味が無い。永斗はそう考えていた。

しかし二年になると実戦形式の訓練や対人の手合わせなども行うと言う話しだ。

「どうだろうな。午後だけだとまだクラス単位の行動は多いかもしれないけど、去年よりはクラスとしての関係は薄くなるかもな。体育祭とかあれば別かもしれないけどな」

「護衛科と能育科で体育祭なんてやったら死人が出るよ」

幸也が苦笑する。

教室には徐々に生徒が増え、すでにほとんどの席が埋まっていた。各々に近くの生徒と会話したり、教室の後ろや廊下で集まって知り合いと話したりしている。時間を見るとそろそろホームルームが始まる時間だろう。

すると前のドアから一人の女性が入ってきた。どこかおどおどしているように見える。

それを見た生徒たちは席に戻った。

女性は教卓の前まで来ると、席に座った生徒を一通り見回し、大き

く深呼吸。

「えっと、今日から一年間このクラスを担当します神宮 美里じんぐう みさとと言います。よ…よ、よろしくおねがいします」

美里は黒板に大きく神宮美里と書く生徒たちに向かって一礼する。そしてそのまま教卓に頭をぶつけた。

所々から生徒の笑い声が漏れ聞こえる。それに続くように「みさとちゃんがんばって」などと声援も飛んだ。

美里は極度の上がり症として校内でも有名であり、またその持前のルックスから、守ってあげたいオーラを常に放出している。男子生徒からも女子生徒からも色々な意味で人気が高い教師だ。

だが友人感覚で人気が高いことに、美里自体はかなり困っていたりする。

「えっと、今日から二年生は、通常授業が始まります。」

その声にブーイングが上がる。

「しょ…しょうがないんです。上の人の決定なんです。私だって本当はやりたくないんです」

何かとんでもないことを口走った気がするが、生徒はなれているのか全員が聞かなかったことにする。これも美里が担任をする上で、かなり重要なことだ。

美里のテンパった状態の発言をいちいち真に受けていては、授業が一向に進まなくなる。

「それとホームルームが終わったら、幸也くんは体育館に行ってください」

「はい、わかりました」

そこに他の生徒から「なんで」と疑問が飛ぶ。

「幸也君は能力育成科の佐々木文美さんと一緒に入学式の円舞出てもらうんですよ」

その説明に今度は「おお」とクラス中が驚く。永斗も昨日聞いていなければ、一緒になって驚いていただろう。

美里は「それと」と言って話を続ける。

「二年生からは午後は全て実技練習になるので、間違えないように時間割を確認してくださいね。これで連絡は異常です」

そう言つて美里が教室から出て行くのを見送り、生徒たちは各々に動き始める。

授業の準備を始めるもの。隣り合う生徒と話すもの。席を立ち、トイレに行くもの。

永斗は授業の準備を始めていた。

一般教科の成績が振るわない永斗にとっては、まだ分かりやすい最初のうちの授業を聞き逃すと、後々大変なことになる。それを一年の時に実感していた。

そこに、幸也がやってくる。

「永斗君」

「どうしたんだ？体育館に行かなくていいのか？」

「うん。円舞自体は入学式が終わった後にやるからそんなに急がなくても大丈夫」

「そうなのか」

「永斗君ほんとに去年の入学式出た？」

入学式の段取りを全く覚えていない永斗に、幸也が苦笑する。

「もう一年も前の話さ」

それに永斗はおどけて返した。

「それより、お願いがあるんだ。このあと体育館に行ってる間の授業のノートを代わりに取っておいて欲しいんだ」

幸也は持っていたノートを永斗に差し出してくる。それを見て永斗はムツと眉間にしわを寄せた。

「最初の授業だし、お前ならノート見なくても分かる様なものばかりだと思うぞ？」

「うん、そうなんだろうけどね。一樣」

「まあわかった。ノート取るのはあんまり上手くないが文句言つなよ？」

言いながらノートを受け取る永斗。

「ありがとう、助かるよ」

幸也はそう言くと、教室を出て行った。それを見送った永斗は小さくため息をつく。

「ほんとにノートは苦手なんだがな」

まじめに授業を受けていたことがほとんど無い永斗は、ノートを取ることほとんど無かった。大抵はテスト前に、椎名や幸也、またはクラスの友人に貸してもらったりする程度だ。

受け取った白紙のノートを見つめながら、また小さくため息をついた。

授業を受けながら永斗は、懸命に黒板に書かれたことを写し取って行く。

最初は椎名や友人たちのノートの取り方を思い出し、参考にしながら書こうとしていたが、自分の筆箱を開いた時点でそれは諦めることになる。

「色が足りない……」

椎名の様にカラフルなノートを取るには最低でも四色の色ペンと三色のマーカーが必要になる。

しかし永斗の筆箱には、黒のボールペンと赤のボールペン。シャーペンが二本に消しゴム、それと定規が一本入っているだけだ。

「しかたない。色付けて書いてるところは、全部赤で行くしかないか」

教師ですら黒板にカラフルなチョークを使って書いていく。それを永斗は全て赤のボールペンで代用した。

その結果が

「これは酷いな……」

授業が一駒終わり、自分の取ったノートを見返す永斗の感想がこれである。

黒板ではカラフルに色分けされ、重要な所は強調されるようになっていたのが、全て赤色で埋め尽くされ、どれも本当に重要なのか分

からなくなっている。

「よし、諦めよう。やっぱり自分の書き方じゃないと上手く掛けないしな」

どちらにしろ、自分の書き方では酷いものしか取れないことを棚に上げ、永斗はいつも通り黒一色でノートを取って行くことに変更した。

円舞を終え、戻ってきた幸也に永斗は頭を下げながらノートを返す。
「すまん。俺じゃお前みたいに上手くノートを取ることは出来なかった」

ノートには黒と赤で黒板の内容がそのまま書き写されていた。そのせいで授業を受けた人間なら分かるかも知れないが、授業を受けていない人間にとっては何をやったのかがよく分からない状態になってしまっている。

永斗はその事について謝罪していた。

「そんな気にしないでよ。もともと僕の勝手をお願いしたことなんだし。」

それにノートに今日の内容が書いてあればどこが重要かはなんとなく分かるから大丈夫だよ。」

そう言っただけで幸也を見て、永斗は少し安心する。

「そうか、すまん。こんど重要な所教えてくれ……」

「……ノート取りながら授業受けてたんだよね？」

「ノートに集中しすぎてまともに授業を聞いていなかった。いや、聞いてはいたんだろうが全く頭に残って無い」

「はは、永斗らしいね。じゃあ後でこのノートを参考にしながら重要そうな所を教えるよ」

「助かる……」

「まあまあ、そんなに気を落とさないで。ノートをまとめるのって結構コツが必要だから。永斗も毎回しっかりノートを取るようになれば次第に上手くなっていくと思うよ？」

落ち込む永斗に幸也が励ましの言葉を掛ける。

「そうだな。なんでも最初から上手くできる奴なんているはず無いもんな」

「そうだよ。なんでも練習の積み重ねが大事さ」

永斗のポジティブさに少し安心しながらも、幸也は取ってもらったノートを見て、高校生でこれほどノートが取れないのは、かなり問題じゃないかと秘かに思うのだった。

一般教科が午前中四時間目まであり、その後昼食の時間を挟んで午後の実技訓練が行われるのが二年生からの基本的な流れだ。

永斗は今、幸也とともに昼食を取りに食堂へ来ていた。

今日はまだ新入生は午前中の入学式だけで終了なので食堂には二年生以上しかない。

それでも相当な混みようではあったが、永斗たちは何とか二人で四人用のテーブル席を確保することに成功した。

四人掛けを確保したのはもちろん後から来る椎名と文美のためだ。

「なんとか確保できたな」

「結構ぎりぎりになっちゃったけどね。明日からは一年生も入ってくるからもつと厳しい席取りになると思う」

「もうちょつと学食大きくできないもんかね。明らかに生徒数に対して学食の規模が小さいだろ」

全校生徒が千人程度に対して、学食の店員数はだいたい二百人前後と言ったところだ。

いくら家からの弁当持ちや購買で購入している人達を覗いても二百人では到底おさまらない。

「どうなんだろね。こればかりは人員とかの問題もあるし難しいんじゃないかな」

「学年代表で円舞をやった幸也ならなんとか教師に頼めないか？」

「それは無理。別に僕は成績が良くて選ばれた訳でも、まして強さで選ばれたわけでもないからね。たまたま円舞に向いていたってだ

けのことだもん。そんなこと言う力は無いよ。むしろ実技試験トップの永斗の方がこうゆうのはお願いできるんじゃない？」

「二期生になるのが一番最後でもか？」

「無理だね」

幸也は笑顔のまま否定する。

そんなことを話しているうちに食堂の入口に椎名と文美がやって切るのが見えた。

「椎名！こつちだ」

入口付近できよきよと見回していた二人に永斗が声を掛けて場所を教える。

二人はその声に気づいてこちらにやってきた。

「偉いじゃないちゃんと四人席を確保しておくなんて」

「そうしないとお前からのお小言がきついからな」

偉そうに言う文美に永斗が返す。

「当然よ。ガーディアン目指してるんなら、能力者には常に最高の状態を用意しておいてもらわないと」

「ガーディアンはパシリか！」

「まあまあ。文美もその辺にしろかないと、今度から席取つというもらえなくなるよ？」

椎名の仲介が入るが、さりげなく椎名もガーディアンがパシリであることを否定しない。

その後椎名たちも料理を持ってきて一緒に食事を取る。食事中的話題は必然的に午後の授業のことについてになっていた。

「午後の実技訓練って能育科と護衛科が合同でやるのよね？」

「そうみたいだね。先生が言うには三年生も一緒にやるって話だよ」
「なら三年が二年の面倒を見る形になるかもな」

全体的に教師の少ない防衛学校では、その不足分を補うためにはどうしても生徒同士で補ってんしてもらわなければならない。

そのため上級生が下級生の指導をすることも珍しくは無かった。

「私、結構楽しみなのよね。実際にBランクの依頼とか行ってる先

輩に教えてもらえるわけでしょ？それってかなり良いアドバイスとかもえそうじゃない」

「そうだね。僕たちだとまだ小型のイフイムしか倒したこと無いし、中型が入ってくるとだいたい戦い方も変わってくるって聞くもんね」

「でしょ。ぶつつけで中型とかの依頼やるより断然気が楽になるわ」
「私も能力の使い方とか応用できそうな人に教えてもらえたら良いな」

それぞれに実技訓練を楽しみにする声の中一人だけあまりおもしろくなさそうな顔をする永斗。それに気づいた幸也が永斗に聞いてきた。

「永斗君は楽しみじゃないの？」

それに対して永斗の答えは簡潔だ。

「正直、三年だからって出しゃばる奴もいるだろうからな。あんまり期待は持ちたくない。それに変に目立って目を付けられるのも嫌だし」

「たしかに永斗なら目立つかもね。でも強い先輩と訓練出来れば何か参考になることもあるんじゃない？」

「そうだと良いんだけどな。正直、師匠以上の強さを持った先輩って言うのが想像でせん」

本物のガーディアンとして働いてきた椎名の母にスパルタ教育を受けてきた永斗には、学生でそれ以上の強さを持った人に会ったことは無い。

腕を組みつむむと唸る永斗。そして思い出しているのは師匠との戦闘訓練だ。

護衛科の実技訓練などで使われる模造剣などではなく、本物の刃の付いた真剣での撃ち合いは実戦に近い緊張感があった。あの緊張感を学校指定の模造剣でも出せるかと思うと、不可能だと永斗は思っている。

それらを総合的に考えて、永斗はあまり上級生の教えを期待していなかった。

「そりゃ本物のガーディアンと学生じゃ比べ物にならないよ。でも体格とかの違いで動きが違ってくることもあるかも知れないと思うよ？そうゆうのを研究してみたら？」

「うーん。まあそのあたりも今日実際に会ってみてどうなるかな。強くなれるんなら、なんでも利用してやるさ」

永斗達は午後の実技訓練の準備のために、早めに食堂を後にした。

三章

防衛学校のグラウンドは広い。

どのくらいかと言われれば、通常高校の優に四倍はあるだろう。

それも、グラウンドごとに区切りがあり、半分が通常の砂が敷き詰められたグラウンド。

残りの半分を廃ビル地帯と森林地帯に区切られて存在する。

イフィムの生態に合わせた実技訓練のために、わざわざ用意された施設だ。

防衛学校のグラウンドを設置するうえで真っ先に必要とされたのがこの三種類だった。

この広大なグラウンドを用意するために、国際連合は元野球場の跡地を再利用、さらにその周りの民家を片っ端から買い取り防衛学校を設立した。

当初は住民の反対もあったそうだが、イフィムの討伐をするための高校ということもあり、何とか協力を取り付けることができたそう

だ。

実際にはかなりの金 flowed との噂もある。

真実はどうあれ、そのおかげで今永斗たちは十分な広さのグラウンドで訓練ができるようになっていたのだ。

さらに今ではグラウンドのほかに、自分の武器を整備するための整備塔。さらに能力者のために、専用のトレーニングルームが設置されている。

トレーニングルームは多種多様な能力者の練習をカバーするために既存の設備に加え、生徒が注文すればどのような設備でも設置してくれるという贅沢ぶりだ。

そこからも能力者の重要性はうかがえる。

永斗のクラスは、現在そんな広大な砂地グラウンドの一角に集まっている。

昼食を食べ終えた一同は、各々の判断で実技訓練のための準備をして外に出てきた。

そこまではよかったのだが、実技訓練をするだけ聞いていて、それ以外は何も教えられていなかった一同は、外に出てきたところで途方に暮れていたのだ。

それは、他のクラスも同じようで、永斗たちのクラスのみならず、ほかの護衛科のクラスの面々も、それぞれに自分たちの立ち位置を決めて集まっていた。

そしてグラウンドを挟むように小さく見えるのが、おそらく能育科の面々だろう。

護衛科と違って、女子生徒の数も男子生徒の人数とさほど変わらない。

端的に行ってしまう花がある。

能育科も詳しいことは聞いていない様子で、護衛科とさほど変わらない集まり方をしていた。

「これからどうするんだ……」一人の生徒がつぶやく。

そろそろ午後の授業が始まる時間だ。それでもなお姿を現す気配のない教師に、不安を覚え始める生徒が出始めた。

「集合場所が間違っているんじゃないのか?」「何か準備しとかなければいけないんじゃないのか?」「完全に自習でやることになるのか」など、その不安は次第に生徒の間に広がり、ざわつきという波紋を広げていった。

護衛科全体に波紋が広がりきったところ、授業開始のチャイムとともに一陣の風が通り過ぎた。

風は砂を巻き上げ、視界を奪ってゆく。そして一人の男子生徒の、叫び声とも悲鳴とも取れない声がグラウンドに響き渡った。

その声を聞いた生徒たちに緊張が走る。

そんな中、永斗や幸也を含めた数名の生徒は落ち着いていた。

それが、今来たばかりの教師の攻撃だと分かったからだ。

悪くなった視界の隙間を見つけ、能育科のほうを見ると、そちらも

同じようになっているのが見えた。

おそらくそちらにも、能育科の教師が襲い掛かったのだろう。

最初の生徒の悲鳴に続くように、あちらこちらから悲鳴が上がる。

「幸也！」

「うん。わかってる」

永斗と幸也は、とっさにお互いの背中をかばいあうように立ち、それぞれ武器に手をかけた。ついでに永斗は足元をこそその動かし、立ち位置を安定させる。

鋭い敵意が永斗を襲う。教師が今度の目標を永斗に定めたのだ。そして振り下ろされる斬撃。

永斗はその斬撃を自らの剣を鞘から抜きさることなく、鞘ごと斬撃を受け止めた。

重い衝撃が両腕に走るが、足元がバランスを崩すことはしない。後ろでも同じように、ガキンッと鉄がぶつかるような音がする。

二人の教師の攻撃が受け止められてことによって、徐々に巻き上がっていた砂埃が薄れてきた。

「いきなりだな。こんなスパルタじゃ生徒がついてこれないぞ？」

「ふん！この程度に対処できないようでは！イフームとの戦いではただの足手まといだ！！その程度の奴らは！さっさと追い出すに限るわ！！」

砂埃の先から見えてきたのは、鍛え上げられた肉体で模造剣を振り下ろしているタンクトップ姿の教師。

「実際使える連中はこの事態に落ち着いて対処した！お前や後ろの奴がそうなるな！！」

永斗の背中では、同じように幸也がクナイで教師の模造剣を受け止めていた。

「先生……さすがにこれはやり過ぎだと思えますよ？」

幸也が呆れたように教師に話しかける。それに教師は

「ハッハッハ！問題ない！一年後には！ここにいる全員が今の奇襲に対処できるようになっている！！」

会話が噛み合っていないそうで噛み合っていなかった。

そこで永斗が受け止めた教師が「だが」と続けた。

「だが教師の人数をちゃんと確認せずに！各々に対応したのは間違いだっただな！相手が常に目の前にいるとは限らないぞ！」

その声とともに永斗の左手からもう一人の教師が迫ってきた。

永斗は両手で剣を持ち受け止め、幸也も両手のクナイで模造剣を挟むように受け止めている。二人とも手の離せない状態で三人目の対処は不可能に見えた。

「抜かりはない！」

永斗は教師の言葉に一言で返す。その言葉の意味を読み取れず教師は眉をひそめた。

それを無視して永斗は右足を少しだけずらした。

そして足の下には野球ボールサイズの鉄の塊。

永斗が自作した閃光弾だ。通常の閃光弾では威力が強すぎる上、目だけでなく耳も使えないようにするため、強烈な音を発生させる。基本的にイフィムは耳が聞こえないといわれており、討伐に使う際は自分を苦しめるだけになってしまったため意味がない。

そこで永斗は、威力の調整と強烈な音の出ない閃光弾を自作していた。

足をずらしたことで安全ピンが抜け、信管の時限装置が作動した。

そしてサッカーボールを手元に蹴り上げる要領で真上に飛ばす。

閃光弾は、永斗が構える剣のちょうど外側ではじけた。

眩い光があたり一帯を覆う。この光にはさすがの教師達も驚いて一瞬動きを止めるが、永斗は自らの剣の影で眼を庇い、光を直視しないようにした。

一瞬の隙について永斗は襲い掛かってきた教師を引き離すと、幸也の肩に手をかけ思いつ切り引いた。

突然の行動に幸也も驚き、バランスをとることもできず、しりもちをつくように倒れこむ。

そこに幸也とつばぜり合いをしていた教師が倒れこんできたのを、

永斗は待ち構えていたように蹴り飛ばした。

蹴り飛ばされた教師は狙い澄ましたように、閃光弾で足を止めた三人目の教師にぶつかり、巻き込んで倒れる。

最後に、最初に押し返した教師に、今度は完全に鞘から剣を抜いて対面した。

「三人目がいることは分かっていた。途中で離れたから、保険だけかけて対処したただけだ」

「……完敗だ！」

少しの沈黙ののちに、教師は模造剣から手を離し両手を挙げた。

「ここまで奇襲を完璧に裁かれたのは八年前以来二回目だ……！」

「毎年こんなことやってんのか？」

「二年生に実技訓練の洗礼をしてやるためにな！防衛学校の伝統だ……！」

「いちいち声を張るな！やかましい……！」

そう言つて、しりもちをつかせてしまった幸也に手を貸し、立ち上がらせる。

「永斗君は本当にすごいね。完全に先生達を圧倒しちゃったよ」

「そうでもない。さつき伝統とか洗礼とか言つてただろ。あいつらは俺たちが対処できるかできないかの、ギリギリのラインでしか攻撃してこなかったからな」

「それでも十分すごいと思うよ。僕なんて一人抑えるのが限界だったもん。三人目まで考えてもいなかったし。さすがは実技試験トツブだね」

「おだてても何も出ないぞ。それより能育科の方も、だいぶ収まったようだな。あいつら大丈夫か？」

護衛科の教師陣が制圧され、通常授業をするために生徒に集合をかけているとき、能育科でも同じように集合がかけられていた。

突然の砂埃に椎名がパニックにならなかったのは、永斗の無茶っぷりをずっとそばで見えてきたおかげだったのだろう。

視界が悪くなっていく中で文美の手を引き、逸れるのを避けた。文美も特にパニックになっている様子はなかったが、動揺はしているようだ。しきりに周りを確認しようとしている。

「なにが起きたの!？」

「わかんない。けど、このパニックだとちょっと危ないかも……」

能力者がパニックになるのは非常に危険だ。訳も分からず能力を連発すればどこからどのような力が飛んでくるかわからない。しかも今はそんな能力者がクラス単位で密集している。

「そうね。私たちはどう動こうかしら？」

「とりあえず能力は使わないほうがいいと思う。と言うより私は、こんなに砂埃が立つちゃうとほとんど使えなくなっちゃう……」

「私の能力もここだとあんまり意味なさそうね。こんなところで刃物作ってもむやみに人を傷つけるだけだろうし」

「じゃあ私たちは砂埃から出ることを優先でいいかな？」

「賛成」

手早く方針を決めると、二人はまず、自分たちがどの位置にいるのかを考える。

今二人がいるのは、能育科の校舎から百メートルほど離れたグラウンドの片隅だ。

「ここからならグラウンドの真ん中に行くよりも、校舎に戻ったほうがいいと思う。先がどうなってるか分からないし」

「そうね。校舎の中までは砂埃も入ってきてないでしょ」

すると、突然校舎側にいた生徒たちから悲鳴が上がった。

「何!？」

「ここからじゃ何も見えない。もしかしたら誰かの能力にあたったのかも……」

いよいよまづくなってきたぞと考えながら、二人は校舎に入るのをあきらめる。

校舎側の生徒から悲鳴が聞こえたと言うことは、そちら側は能力を誰かが使った可能性がある。どんな能力かもわからないのに、その中に飛び込んでいくのは自殺行為だ。

「校舎側に近づくのはあきらめるとして、どうする？私的には、こはまだそこまでパニックになつてないみたいだし、このままここにいてもいいと思うんだけど」

「砂埃の原因がわからないから、正直ここもそこまで安全とは言えないと思うな。この砂埃も能力の影響だとすれば、ここらへん一帯が能力の中つてことも考えられないかな？」

「確かにそれもそうね。じゃあちよつと危ないけどグラウンド側に逃げようか」

悲鳴は校舎側から徐々に椎名たちのいる場所に近づいてきている。パニックが広がっている証拠と考えた二人はグラウンドの中央に移動することを決めた。

そこにはもしかしたら、永斗や幸也が助けに来てくれているかもしれないという、淡い期待も交じっている。

砂埃の中を慎重に進んでいると、椎名が何かにつまずいた。

文美はとつさに手をとって椎名を支える。

「ごめんね。ありがとう」

「これくらいいいわよ。それより何に躓いたの？こんな平坦なところで躓くなんて珍しいじゃない」

「う、うん。なんだろう？」

二人が振り返つてみると、そこには人が倒れていた。見覚えのある顔だ。

「「山田君！？」」

倒れていたのは、一年生の時に同じクラスになった男の子だ。急いで駆け寄り、倒れている山田を見る。

特に外相はない。目立つものといえば、椎名が踏んづけた足跡ぐら이다。

きれいに気絶させられている。

「これって能力でやられたって言うより、物理技で意識を刈り取られたっばいわね」

自分でもある程度、直接戦闘に参加する文美が山田の状態を調べる。

「物理技？」

「そうね。たぶん……うん、間違いないと思う」

「じゃあ、この砂埃の中で私たちを襲っている人たちがいるってこと？」

「そうなるわね。これは私たちも、いよいよ危なくなってきたかもしれないわよ」

悲鳴の波はすぐそこまで迫っている。それどころか山田が倒れていたということは、すでにここも見えない敵の攻撃圏内ということだ。「私たちも戦う覚悟がいるってことかな。一瞬でも太陽の光があれば、能力も使えるんだけど……」

「一瞬あれば何とかなるの？」

椎名のつぶやきに文美が反応した。

「うん。太陽の光があれば、私たちを見えなくすることぐらいならできるよ」

「ならそれをやりましょう。私が砂埃を払うからその時に使って」
「できるの!？」

「任せなさい。だてに佐々木的能力者やってないわ!」

文美は自分の服のポケットから数枚の木の葉を取り出す。そして能力を発動した。

何の変哲もないただの木の葉はそれに影響を受け、徐々にその硬さを増してゆく。

木の葉は、数秒で鉄となんら変わらない硬さにまでなった。

「椎名、私がこれをばらまいたら一瞬だけ光が入るから。タイミング逃さないでね」

「うん!」

「行くわよ!」

文美が投げ上げた木の葉は、風に流されることなく真上へと昇って

ゆく。

そして、それぞれの木の葉はひもでつながれていた。

「佐々木流木の葉術風変葉^{ふうへんよう}」

硬度を極限まで上げられた木の葉は、風に流されることなく、逆に文美が糸を引くことによつて風を生み出す。

文美が巧みに意図を操り、二人のまわりに小さなつむじ風が巻き起こった。

それは一瞬だけ砂埃を拡散させ、椎名のもとに光を届けた。

「来た！ライトミラーージュ！！」

椎名は一瞬だけ届いた光をかき集め、二人のまわりの光を屈折させた。

屈折させた光は二人を周りの視界から消す。

「文美、うまくいったよ！」

「やったわね。じゃあとつとこの砂埃から脱出しましょ」

「うん。でも光で姿は見えなくなっただけ、気配とか声とかは消せないから気を付けてね」

「了解」

二人はお互い離れないようにしながら慎重に進む。

すると突然、椎名の右手から悲鳴が聞こえた。

驚き振り向くと、男子生徒が倒れるのが見えた。そして、倒れた生徒の先にもう一人の女性。

「あれって……」

驚いて声が出そうになるのを、文美がとつさに口を押えて止めた。

女性はこちらには気づいていない様子で、次の獲物を選ぶように当たりを見回している。

二人はアイコンタクトで合図を取り、女性の視界から消えるまで息をひそめひっそりと後退した。

完全に女性が見えなくなっただけで、二人は大きく息を吸う。

「今のつて先生だったよね」

「うん。能育科の二年生担当の人だった。職員室で先輩と実技訓練

について話してるのを見たことある」

「じゃあこれは、先生が仕掛けたこと？」

「そう考えるのが妥当かなー。ただそうするとこれは、実技訓練ってことになるのかな」

話しながら歩いているうちに視界が開けてきた。

ちょうどグラウンドの中央に出たようだ。

「むこうも同じようなことされてるみたいね」

文美の視線の先には、こちらと同じように砂埃の覆われた護衛科の姿。だが少し様子がおかしい。こちらの混乱に比べて、護衛科は静かすぎるのだ。

「どうしたんだろう？もしかして先生に全滅？」

「護衛科ってかなりスパルタって話だしもしかしたらそうかも……」

二人が見ていると、突然チカッと強烈な光が護衛科の砂埃からした。

「キヤッ！」

「何ごと！」

とつさに目をかばう。しばらくすると目からまぶしさが消えていった。

目を開け、再び護衛科を見た二人は、重なるように倒れている教師二人と、しりもちをついた幸也。そして剣を教師に向けている永斗の姿が目に入ってきた。

はたから見ても、完全に教師を圧倒している。

「あれってもしかして永斗の？」

「さっきのチカッて光ったやつ？」

「うん、春休み中に閃光弾自作したって言ってたから、もしかしたらそれかもしれない」

「やつは武器まで自作してるのか……」

「前々から考えてはいたみたいだけどね。実際に作るのは初めてじゃないかな？」

「じゃあ教師は艇^{てい}のいい実験台になってたわけね。ご愁傷様だわ。あら、こっちも終わったみたいよ」

振り返れば、今までもうもうと立ち込めていた砂埃が徐々に晴れて
いつている。

「何とか生き残れたみたいだね」

「これも椎名のおかげだわ」

「文美ちゃんが光を入れてくれたからだよ」

「じゃあ二人の成果ってことで」

「うん、そうしとこ」

教師の集合の合図がかけられ、椎名たちは言われた場所に集まって
いった。

四章（前書き）

どうも一回の章で文字数が多すぎた気がしたので、少し減らしてみます。

加減を見てまた変えていくつもりです。

四章

襲撃を終え、集合を掛けられた後、近くで倒れている生徒を起こしながら永斗たちは集まった。

「ようし、お前ら！集まったな！」

教師の無駄に威勢のいい声がグラウンドに響き渡る。

「今俺たちがお前たちを襲撃したのは！お前たちに自分の实力を知ってもらうためだ！」

護衛科の生徒たちが集合したのは、ちょうど護衛科の校舎の正面。

左から順番に一組、二組と五組まで並んでいる。

その前に先ほど生徒たちを襲撃した教師が三人並んでいる形になる。
「我々もごく一部の生徒に後れを取ったが！大半の生徒は手も足も出なかったのが分かってもらえたと思う！」

お前らはまだ弱い！確かに実習を経て！小型のイフィム程度なら正面から戦えるようになったのかもしれない！だが！だが！！今のお前たちが中型以上のイフィムと正面からぶつかった時！待っているのはお前らの死！だけだ！！」

教師の言葉を聞きながら、永斗は耳を押さえなくなる気持ちを必死に抑えていた。

先ほどから教師の言葉は、息継ぎの部分がやけに気合が入っている。これが護衛科教師独特の喋り方なのは、なんとなく分かつてはいるが、一年たつてもどうしてもなれない。

他の生徒たちもうるさそうに眉をしかめている。

「今日からの実技訓練は！そんな弱いお前たちが中型や大型イフィムとともに戦えるように鍛え上げるものだ！今までの様に体育の延長だと思っていると死ぬぞ！覚悟しているよ！！返事は！！！」

「『はい！』『はい！』『はい！』」

「よし！では今日のメニューを伝える！」

生徒たちの威勢のいい声に満足したのか、教師はうんうんと頷き、

手に持っていた板を見る。おそらくそれに今日の訓練メニューが書かれているのだろう。

「まず先ほどの襲撃にきちんと対処出来たメンバーだ！名前を呼ばれた物は列から離れて後ろにいる教師の所へ行くように！斎藤！松田！畑山！……」

次々の呼びあげられる名前の中にはもちろん永斗の名前がある。その次に呼ばれたのは幸也だ。

とっさの判断力と、永斗との連携を評価されたようだ。

言われた通りに、永斗と幸也も列を抜けて後ろへ下がる。

「以上が！俺たちの襲撃に比較的まともに対処出来た面々だ！後の残った連中はパニックになり、まともに判断することができなくなっていた！」

後ろに立っていた教師の元まで行っても、グラウンドに響き渡る前に立っていた教師の声は、はつきりと聞こえてくる。

これなら間違いなく能育科の生徒にも聞こえているだろう。

「パニックになった連中は！今日から精神を鍛えるために！実技訓練の始まりと共にグラウンドを三十周してもらおう！！」

その声に「「え」「」と不満の声が上がる。

「お前らの様なクズが！まともに訓練を受けさせてもらえと思うなよ！！クソ虫どもはまずは基礎からみっちり鍛えなおしてやるから覚悟しておけ！！おら走って来い！ゴミども！チンタラすんな！！」

何か暴言が聞こえたような気がしたが、永斗も幸也も聞かなかったことにした。

生徒たちがぶーぶー言いながらもグラウンドを走り始めると、列後方に呼ばれた生徒たちに説明が始まる。

列の生徒たちが罵倒されている間に説明しておけばいいのと思うかもしれないが、前で説明していた教師の声がグラウンドに響き渡るように、後ろの教師の説明もグラウンドに響き渡るのだ。

おかげで同じタイミングでしゃべられると、何を言っているのか全

く分からなくなる弊害がある。

教師たちもその事は分かっているらしく、誰かの説明が終わるまでは次の教師はしゃべらないのだ。

声を落とせば問題は全て解決するのだが、それが出来ないのが護衛科教師である。

「ようし！お前らに訓練説明をするぞ！」

教師の声にバラバラに集まっていた生徒が注目する。

ここにいるのは、ある程度教師の襲撃に対処した生徒ばかりだ。今グラウンドを走っている生徒とは違い、イフイムとの戦いを知っている面々と見て良いだろう。

「お前らは俺たちの襲撃に対し！適切な対処をした面子だ！そこでお前らには基礎トレーニングを特に強制することは無い！なぜなら自分たちで基礎の重要性を分かっていると判断したからだ！この判断に間違いは無いな！！」

生徒たちが無言でうなづく。

「今日は特に訓練のメニューは無い！今日はお前たちの実力を確かめるために用意した時間だと思ってくれればいい！この後は自習とする！グラウンドを使って好きに訓練している！ただ能育科の能力に気をつけるよ！ボーっとしてるの変な能力が飛んできたりするかな！俺はこの後、先ほどの襲撃からお前たちに適した訓練メニューの作成をする！邪魔したら殺すぞ！」

教師は言うだけ言って校舎に戻って行ってしまった。

後に残された生徒たちは、突然自習と言われ、動くに動けずにいる。

「永斗君。どうしようか？」

幸也が永斗に話しかけるが、永斗は何も反応しない。

「永斗君？」

いぶかしんだ幸也が永斗の肩に手を乗せる。

それに反応した永斗が、幸也を振り向いた。そして耳から何かを抜き取った。

「悪い。耳栓してたから気づかなかった。何だ？」

「耳栓なんていつの間に付けてたの？」

幸也が呆れるように聞く。

「列から移動するときにな。これ以上うるさいのはたまらん」

「僕も今度から耳栓付けようかな……まだ耳がキンキンしてる……それで自習どうする？」

「簡単に素振りと型の練習でもするかな。このまま何もしないのはもったいない」

「僕もそうしようかな。あ、そうだと体が温まったら少し練習相手になつてくれない？少し試してみたい動きがあるんだ」

「別に良いぞ。でもイフイムと人間じゃ動きが全然違うが大丈夫か？」

イフイムに人型が確認されたという例はほぼ無い。

ほとんどが動物に似せた形のため、動きの練習をしなくても、なかなかできないのが現状だ。防衛学校の大学研究室では動物を訓練して、仮想のイフイムとして戦わせようと言う試みもあるようだが、いまだ成功の兆しは見えていない。

「大丈夫、大丈夫。これはイフイム用じゃなくて対人用だから。最近、文美ちゃんの周りに変な人が多くてね。少し対人用も考えとかないといけないかなって思ったんだ」

「文美のやつ、お家騒動に巻き込まれてんのか……」

名家と言うやつの跡継ぎ問題に、永斗は露骨に嫌な顔をする。

椎名の家は、本家とは完全に別れた分家であり、跡取りが椎名しかないなので、特にそういった問題がでてきたことは無いが、他の能力者の話を聞くと、よくある問題だったりする。

能力者の家系と言うのは、代々受け継がれるもので、莫大な財産を持っている。それを得ようとする分家は後を絶たず、時にはまったく関係ない第三者までもが、その財産を狙って能力者の子供を誘拐しようしたりする。

また能力者は国にとって重要な存在であり、その能力者を輩出した家は政治的にも強い力を持つ。そのため、能力者の子供は大人たち

の政治の道具にされかねないのだ。

今幸也の言った変な人とはこれらの人間だろう。

「まあ、そう言うことなら相手になるさ。三十分後ぐらいでいいか？」

「うん。それぐらいよろしく」

そう言ってそれぞれに愛用の武器を持ち、自主練を始めた。

同じように椎名たちも、能育科校舎の前に集合していた。こちらは護衛科の教師と打って変って、女性の教師が前に立っている。

先ほど椎名たちが目撃した教師だ。

「まずは皆さんお疲れさまでした」

女性は凜とした声で話します。ただその声を聞いている生徒は、最初の三分の一にも満たない。

それは教師の集合の声を聞けたものが、グラウンドに集まっていた生徒の、全体の三分の一以下だったことを示している。

他の生徒は未だ、グラウンドに横たわっている。

特に教師たちが起こす様子も無いので、椎名たちも起こさずに集まってしまった。

「ここにいる皆さんはすでに気づいていると思いますが、先ほどの攻撃は私たちのものです。これは今の皆さんの実力を再確認していただく意味で実施している、伝統行事みたいなものです」

生徒の数人がその発言に「ええ」と不満の声が上がる。

当然だろう。伝統だからと言われて、襲われたのではたまったものではない。

もしかしたら自分がグラウンドに倒れている連中と同じ状態になっていたかもしれないのだ。

「かなり無茶なやり方なのは分かっています。しかし、我々が今後

戦うであろうイフィムは、我々の常識を守ってはくれません。どこから襲ってくるかも、どんな能力を持っているかも定かではないのですから、多少の無茶は覚悟しておいてもらいます」

その言葉に文美と椎名は納得する。

イフィムが常識外れなのは、実習の経験で分かっていたはずだが、どこか考えが甘かったのかもしれない。

奇襲は必ずしもこちらの専売特許ではないのだ。もし今のようにイフィムに奇襲されていたら、今グラウンドに倒れている人達は、全員気絶では済まされなかったであろう。

（私たちも頑張らなきゃだね）

文美に小声で話しかけると、文美は頷いた。

（そうね。護衛科がスパルタとか言ってられないわね。こっちもガングラン指導してもらわなきゃ）

「次に、今後の訓練について話してい

」

教師の声は最後まで聞きとれなかった。

「今俺たちがお前たちを襲撃したのは！お前たちに自分の实力を知ってもらったためだ！」

声は護衛科から聞こえてきた。内容としては、こちらと同じことを話しているようだ。

「では！今後の訓練について話して行きます！」

護衛科の教師の声で、後ろの生徒まで声が届かなかったため、教師はもう一度、先ほどより声を張ってしゃべりだした。

「まず、今日の訓練で

」

「我々もごく一部の生徒に後れを取ったが！大半の生徒は手も足も出なかったのが分かってもらえたと思う！」

お前らはまだ弱い！たしかに実習を経て！小型のイフィム程度なら正面から戦えるようになったのかもしれない！だが！だが！！今のお前たちが中型以上のイフィムと正面からぶつかった時！待っているのはお前らの死だけだ！！」

護衛科の教師の声はそれ以上に通っていた。

グラウンドを挟んだ反対側の椎名たちにまで、何を話しているのははっきりと聞こえてくる。そして案の定、能育科の教師の声はかき消されていた。

（一部の生徒って永斗のことよね）

今度は文美から小声で話しかけてきた。

（そうだろうね。でも幸也君もかなり強いし、その対象には入ってるんじゃない？）

（そうだといいんだけどね。永斗に比べちゃうと、どうしても見劣りするって言うか、地味？）

（まあ、武器が武器だからしょうがないよ。永斗は剣だけど、幸也君はクナイとか忍具でしょ）

（それもそうなんだけどね）

「今日からの実技訓練は！そんな弱いお前たちが中型や大型イフィムとまともに戦えるように鍛え上げるものだ！」

二人がそこそと話す間も、護衛科からは途切れることなく、はっきりと声が聞こえてくる。そして、能育科の教師は顔をひくつかせていた。

「今までの体育の延長だと思っていると死ぬぞ！覚悟しているよ！
！返事は！！！」

「……はい……」

最後に護衛科全員の威勢のいい声が響き渡る。
その声で、キレた。

「あのゴリラどもは！！武山先生！今すぐ彼らの声を遮断してください！うるさくてこちらの話が勧めれません！」

「は……はい！」

武山と呼ばれた、ひよろりとした男性教師は声に驚き、急いで能力を発動させる。

すると、先ほどまでうるさいほど聞こえていた護衛科の声は、全く聞こえなくなった。

「はあ……最初からこうしてもらったべきでしたね。今後もこのよう

なことがあればお願いします」

それに武山は「ええ」と会釈するようにうなずいた

「では、話が中断しましたが、今後の訓練の内容について話して行きます。」

まず、今ここで私の声を聞いている生徒たちは、今日は自主練習の時間とします」

自主練習と聞き、いろいろな所から喜びの声が上がった。

どんな学校でも自習が嬉しいのは共通である。

「ただ、貴重な皆さんの時間を無駄にするのは忍びないので、今日の自習には三年生が監督に入ってくれます」

続けて言われたことに、今度は「え〜」と声が上がった。

教師はそれを無視して話を続ける。

「三年生はすでに中型イフイムとの戦いを経験しています。この機会にアドバイスを聞いておくのも良いでしょう。」

次に、未だに倒れている生徒たちについてですが、起こす必要はありません」

椎名たちが少し気になっていたことをに答えてくれた。

「彼らは私たち教師陣が責任を持って起こしておきます。また彼らには今日はみっちりと基礎訓練をしてもらう予定です。知っていると思いますが、基礎訓練は体力を高めるだけではなく、精神力も高めてくれます。先ほどの様な奇襲でパニックになり、なにもできなくなるのは精神力が足りないためです。彼らにはそれを嫌と言うほど教え込みます」

生徒たちはその発言を聞いて、「やられなくてよかった…」と全員が気持ちを共有した。

（私たち隠れてただけだけど本当に良かったのかな…？）

（まあ、落ち着いて対処は出来たし、良いってことで）

二人は自分たちの対応を思い出しながら、苦笑する。

「来週からは今日の奇襲した際の行動を参考に、個別にトレーニングメニューを渡しますので、それにしたがって行動してください。」

では今日は以上です。各自、自主訓練に励むようにしてください」
そう言つて教師は、周りに控えていた他の教師とともに、グラウンドに倒れている生徒たちの元へ向かった。

「じゃあ、私たちも自主練しよっか」

「そうね。とりあえずストレッチから？」

奇襲の再、ほとんど動かなかった二人は、ストレッチから始めることにした。

五章（前書き）

今週のは少し少なくなってしまいました。来週戦闘パートです。
稚拙な文章ですがお付き合いください。

五章

「で、ただの自主練でどうして喧嘩が起きてんだ？」

今永斗の前には怒り狂った先輩が二人。

そして永斗の後ろには喧嘩腰の文美と、それをいさめようとする幸也。そしておどおどとしている椎名といった形である。

「しょうがないでしょ！あの先輩がいきなり喧嘩ふっ掛けてきたんだから！」

文美は頭に血が上りきってるのか、全く説明になっていない。

「と、文美は言ってるんだけど先輩の意見は？」

「私は、ただちよっとその子を指導してあげようとしたただけだし！」

先輩が指差したのは椎名だ。

椎名はそれにビクツと反応する。

「あ…あの能力の練習してたらいきなり話しかけてきて……」

「はあ！？いきなりって何よ！私がせっかくアドバイスしてあげようとしてんのに！！」

「何言ってるのよ！能力発動中に集中乱すようなことするとか、邪魔以外の何物でもないじゃない！」

「あんたは関係ないでしょ。さつきからうつさいんだけど」

「うつさいってなによ！椎名は私の友達よ！馬鹿にされたら怒るに決まってるじゃない！！」

「馬鹿にされたって何だ？」

文美の言葉に永斗が反応する。いままで喧嘩の原因に、馬鹿にされたとこの言葉は出てこなかったからだ。

「この先輩が、椎名の力を弱いとかしょぼいとか、使えない能力だとか馬鹿にしたのよ！」

「先輩、それは本当か？」

「んなわけないでしょ。現状を的確に言ったら、ちよっと馬鹿にし

たような言い回しになっちゃっただけよ！」

「よく言っわ。明らかにニヤニヤしながら子馬鹿にしてたじゃない！」

「はー！？被害妄想でかつてなこと言わないでくれる！」

二人の口げんかは一向に収まる気配が無い。そこで、今度は先ほどからずっと黙って女の先輩の後ろにいる、もう一人の男の先輩に質問してみることにした。

「で、あんたはどう思ってるんだ？さっきから黙ってるけど、先に手出したのはあんただろ？」

永斗が能育科の生徒の喧嘩にまで口をはさんだのは、ここに理由がある。

最初はただの口げんかだったのだが、それは次第にヒートアップし、騒ぎは護衛科の自主練していた永斗たちの元まで聞こえてきていた。何事かと騒ぎの方に目を向けると、文美が椎名をかばいながら女性の先輩と口げんかをしているではないか。口げんかには、椎名も少なからず参加しているように見えた。

それを見た永斗と幸也は様子を見に、能育科の元に向かった。

その間にも、喧嘩はヒートアップしていく一方だったが、突然先輩の方が振り返り、誰かを呼んだのだ。それが、この黙っている男の先輩である。

見た目がかなりチャライ先輩だが、実力はあるようで、永斗にはそれが動作の節々から分かった。

「どうでもいいし。オレはさやかがやれって言ったからやっただけだしよ。パートナーの支持に従うのはガーディアンとしては常識っしょ」

「そりゃ無いだろ。あんたが手出さなきゃこんな騒ぎにはならなかったんだ。パートナーならこんな無駄なこと止めるぐらいしろよ」

永斗は我関せずといったチャラ男先輩の言葉にイラッとした。

「てかさっきからお前はなんなの？いきなり人の喧嘩の間に入ってきたりして。お前こそ何様だよ」

「俺はその椎名のパートナーだよ。まだ正式にはなつて無いけどな」

「ふーん、そのしよばい子のパートナーなんだ。ならあんたもかなりしよばいってことね」

そこで文美と口論をしていた先輩さやかが割って入ってきた。その口調は文美が言つた通り明らかに椎名と永斗を馬鹿にしていた。

その言葉を聞いた時点で、永斗にはどちらが原因か納得がいった。

「しよばいってあんたは言うが、あんたはどうなんだ？」

「なに？あんた私たちのこと知らないの？よくそれで防衛学校にいられるわね」

永斗の言葉に先輩さやかは笑いだす。

「？…」

永斗はその意味が分からず思わず顔をしかめた。その答えを幸也が言う。

「永斗君。先輩たちは前に話してた三期生トップ成績の能育科のさやか先輩と護衛科の須郷先輩だよ」

それを聞いて、永斗は二人の顔になんとなく見覚えがあるのを思い出した。

「ああ、あのレベルの低い円舞やってたやつらか」

「はあ！？あんたなめてんの！？」

「てめえ、調子こいてんじゃねえぞ！」

永斗の言葉に先輩二人は一気に怒りを増した。

須郷が掴みかかってきたのを永斗は難なく受け流し、逆に突き飛ばす。

「うおっ！？」

思わぬ反撃を受けた須郷は、たたらを踏みながら数歩下がった。

永斗の後ろでは文美と幸也が「やつちゃった」と言わんばかりに顔を抑えている。どうやら文美も少しは頭が冷えて来たらしい。

「何やってんのよ。あんなしよばい子のパートナーなんだから、こいつもしよばいに決まってるでしょうが。三期生トップってのがど

れだけ凄いか教えてあげなよ」

「そんなことありません！」

そこに今までおどおどしていた椎名が大声を上げた。

「私はいくらしょぼいとかへばいとか言われてもかまいません。だけれど永斗君を馬鹿にするのは許せません！」

その声には断固とした意思が込められている。喧嘩を見守っていたギャラリーが、一瞬にして静まりかえる。文美や幸也も椎名を止めに入ることはできなかった。

「永斗君は誰よりも強いです！あなた達なんかに負けません！」
その言葉には永斗もギョツとした。椎名が永斗の強さに憧れの様なものを持っているのは知っていたが、これだけ王勢の前で誰よりも強いなどと言われると、流石に焦る。

「ねえちよつと椎名。それは流石に言いすぎじゃ……」

「そんなことありません！」

文美のやんわりとした忠告も、今の椎名には無意味。むしろ火に油を注ぐ形となってしまった。

そしてその言葉を聞いた先輩がにたゞと笑った。

「なら私のパートナーとあんたのパートナー、永斗とか言ったつけ、その二人で模擬戦してもらいましょうよ」

「そりゃいいな！ちようど運動したいと思ってたんだ」

その意見にすかさず須郷も乗る。

二年生のギャラリーとしては「そんな無茶な」と言った感じだ。

二年生の授業を今日から受け始めた者と、三期生のトップでは明らかに結果は見えている。

しかし、二年生では三年生の先輩を止めることはできない。止めれるであろう三年生の他の先輩は、二年生との模擬戦を面白そうだと思ひ静観していた。

「あれだけパートナーに期待されてんだ。嫌だとは言えねえよなあ！」

須郷は永斗に向かって言葉を吐く。

永斗はそれを見殺して椎名に向かってしゃべりかけた。

「椎名。あとで説教だからな」

声は低く、かなりのドスが聞いている。

「ふえっ!？」

その声にビクツと反応した椎名は我に帰る。

そして永斗は須郷に向き直る。

「いいですよ先輩。模擬戦しましょう」

「いい度胸だ。その度胸に免じて指導的模擬戦をしてやるよ」

「先輩にその余裕があれば良いですけどね」

永斗はあえて須郷を挑発した。

「ガキが。土下座してもゆるさねえ。地べた這い蹲らせてやる」

須郷は額に青筋を浮かべながら永斗をにらみつける。それを永斗は軽く受け流しながら、須郷をにらみ返した。

「じゃあ僕が審判を務めようか」

突然の声に一同がその声の方向に振り向くと、一人の男子生徒がいた。

「そうだな。新島たのむわ。てめえも文句ねえよな？」

「ああ。ないぜ」

「じゃあ準備もあるだろうから、今から二十分後にここで。それまでの私闘は禁止だよ」

「わかってる」

「ああ。問題無い」

須郷の同級生で、同じように二年生たちを指導していた新島が審判に付き、模擬戦が行われることが決定した。

模擬戦はグラウンドの中央で行われることになった。

二人はすでに中央で武器を持ち、五メートルほど挟んでお互いに向かい合っている。

喧嘩を大多数の生徒が見ていたこともあり、かなり注目されてしま

ったようで、二人を囲むように大きな人垣が出来上がっている。
永斗の後ろには椎名、文美、幸也の三人があり、声援を飛ばす。
須郷の後ろにはさやか先輩と他にも数名の先輩が見ていた。

先輩の視線は、永斗を試すように眺めるものや、目立つ二年生をうつとうしく思う視線が混じっている。

「じゃあ二人ともルールを確認するよ。」

まず原則として、相手を殺すことは禁止。これは当たり前だね。次に、刃物の付いた武器だけど、お互いが了承してるみたいだから許可するよ。でもちゃんとトドメは寸止めにするように」

「おいおい、二年生にそんなこと出来るのか？」

須郷が眉をしかめて新島に問う。

その問いに新島は笑いながら答えた。

「須郷は二年生に寸止めが必要な状態に追い込まれるのかな？」
その目は楽しそうに笑っている。

「あるわけねえだろう！」

小さく舌打ちし、永斗をにらむ。

「そりゃそうだよな。なら問題なしだ。永斗君もそれでいいね？」

「ああ、問題無い」

「よし。じゃあ説明を続けるよ」

そう言って須郷に中断された説明を続ける。

「決着の方法は、相手が降参するか、僕が止めるか、相手の武器を弾き飛ばした場合だ。」

最後の場合は完全に無防備になった時点で負けとする。まだ近くに武器があつて対処ができるようだったり、隠して武器を持つてる場合は含まれない。

まあ武器を飛ばしても簡単に油断しないことだね

説明は以上だ。お互いに何か質問はある？」

「制限時間はあるか？」

聞いたのは永斗だ。

「そうだね、あんまり長引くようだと困るし、十分もあれば良いで

しょ。十分たった時点でどっちが優勢かで勝負を決めようか。ちなみに決めるのはここににいる人全員だ。せっかく観客がいるんだから少しは参加してもらわないとね」

「わかった」

「そんなに時間かかんねえよ。一分ありや十分だ」

うなずく永斗に、須郷が挑発を入れる。

それに観戦していた先輩たちが何人か笑う。

「永斗もなんか言ってやりなさいよ！せっかく先輩と真っ向から戦えるんだから！」

先輩たちの挑発に影響された文美が永斗に言う。それを聞いて、永斗はなぜお前が挑発されると呆れた。

だが、確かに真っ向から先輩を挑発出来る時は少ないと思い、文美の意見に賛成することにした。

「そうだな。じゃあ俺は最初一分を防御だけしてるかな」

永斗の発言に二年生三年生どちらもが騒然とした。

一分間何もしないと言うことは、先ほどの須郷の言葉を真っ向から否定する言葉だ。

そんなことを言えば、須郷が激怒するのは目に見えている。

「クソガキが……」

須郷は額に青筋を浮かべながら永斗をにらみつける。

ここで叫ばないのは開始と同時に、怒りを全て初撃に込めるつもりなのだと言斗は考えた。

「じゃあ互いに挑発も終わったところでそろそろ始めようか」

「いつでもいいぜ！」

須郷が大剣を両手で前に構えた。

「こっちもいい」

永斗は剣を両手で持ち、刃を右後ろに流すように横で構える。

「では

始め……！！」

五章（後書き）

稚拙な文章のせいで永斗たちの学校の昇級制度が分かりにくくなっていると感じたので、ここで補足させていただきます。

護衛科では一年生、二年生と入った年から一般と同じように学年は上がっていきます。それは最大で五年生まで存在します。

三年生までに普通科高校で習う一般教科は終了し、四年生以降では大学の希望留年制度と同じような状態だとお考えください。

そしてそれとは別に一期生、二期生、三期生というものが存在します。

これはイフィムの討伐依頼を受けるための学生用の目安です。

入学すると同時に、全ての生徒は一期生とされ、二期生や三期生に上がるには基準をクリアする必要があります。

二期生の場合是一定のイフィム討伐実績と教師一名以上の推薦。

三期生に上がるには一般教科の課程修了と討伐実績、教師一名以上の推薦が必要になります。

そしてガーディアンとして正式に登録するには、三期生で防衛学校を卒業することが必要という形になっています。

六章（前書き）

五千字程度戦闘回です

六章

開始と同時に須郷は一気に永斗との距離を詰める。剣使い同士の戦いなのだから当然だろう。

しかし、一分間防衛だけを言った永斗はその場から動くこと無く、須郷を待ちかまえる。

「はあああああ！」

須郷が叫びながら剣を振り下ろすのに合わせて、永斗は横に構えた剣を、剣先が地面をこするほどに低くしながら振り上げるように迎え撃った。

そのままつばぜり合いに持ち込むのかと一部の観戦者は見たが、多くの意見は違っていた。

永斗の剣は須郷の剣同様両手持ちだが、その剣幅は須郷の物が明らかに太い。

どれほどの名剣であろうとも、そのまま正面からぶつけあえば永斗の持っているものは、それほど苦勞すること無く折れてしまうだろう。

剣が折れた程度では負けにはならないが、今後の戦闘が圧倒的に不利になるのは明白だ。

永斗は案の定正面からぶつけることはなく、須郷の剣筋に対して斜めに剣を入れることでいなすように初撃を交わした。

全力の乗った剣をいとも簡単にいなされたことでバランスを崩した須郷は、強引にバランスをとることなく、そのまま崩れ転がるように永斗の背中に抜けた。

バランスを崩したところに背中から追撃されるのを警戒したのだろう。

一般的な試合ではそれでも良かったのだろう。そしてその行動を躊躇なく選択できる辺り、須郷が実力を持った人間だと言うことは分かる。

しかし、今この状況において、それは須郷をピエロにするだけ行動になってしまう。

立て直した須郷が、素早く背後を振り返り剣を構えて見たものは、最初の位置から一步も動くこと無く須郷を見据える永斗の姿だった。「……てめえ俺を馬鹿にしてんのか」

「言つたら、最初一分は攻撃しないって。早くしないと一分立つちまうぞ？あと三十秒だ」

「クソが！」

永斗の挑発に人垣の中からクスクスと笑い声が上がった。

声は須郷の冷静さを奪うのには威力がありすぎた。

「死ねやクソガキ！」

再び永斗に切りかかる。

今度は全力を乗せることなく、その場に踏みとどまり、突き、振り下ろし、横なぎと次々に技を繰り出す。

しかし、その全てを永斗は、そこから一步も動くこと無く、剣でいなすだけで凌いだ。

そして開始から一分が経過する。

「時間だ。俺も攻撃するぞ」

三十秒間黙々と須郷と剣をいなし続けた永斗が呟いた。

須郷が焦りを浮かべる。

攻撃を受け流し、下に振り下ろされた瞬間をねらって懷に飛びこむ。両手剣は重く巨大な分、懷に入られると他の片手剣やナイフと違い対処ができない。

永斗は左手を剣から離し、須郷の顔面に嘗底を打ち込んだ。

特にガードすることも無くダイレクトに入った嘗底に須郷はふら付いて二歩三歩と下がる。

そこに間をおかず、蹴りを入れた。

鳩尾に入り、須郷は二メートルほど飛び、地面に倒れた。

鳩尾を抑えながら、尚も剣を杖代わりに立ち上がる須郷を見て、永斗は素直に驚愕を浮かべる。

「凄いな。今ので普通は動けなくなるんだが」

「鍛え方が違うんだよ！」

声で気合を入れると共に、杖代わりにしていた剣を再び自分の前に構えた。

だが、永斗の次の一言で須郷は硬直した。

「鍛えてはいるみたいだな。けどあんた、実戦はそこまで経験してないな」

「なっ！」

須郷だけでなく、その場にいた二年生全員が驚愕した。だが、三年生はなにか思うところがあるのか、それほど驚いて無いように見える。

永斗はそんな三年生の姿を見て、確信した。

「あんた程度の実力で一位になれるとは到底思えない。今の剣捌きや防御のとり方なら、今の二年生でも十分対応できる奴らはいくら」

その言葉に須郷の顔がみるみる赤くなってゆく。怒りに震えているのだ。

今まで三期生トップと言われてきたのが二年生になりたての小僧に雑魚呼ばわりされたのだ。怒りもするだろう。

「このガキ殺す」

「やつちやえ須郷！」

須郷の言葉にいままで傍観していたさやか先輩が応援する。

沸点に達したのか、今までの様な威勢のいい声は無く、その瞳には明らかな殺意が見えていた。

そして試合は再開される。

審判役を務めていた新島は少し渋い顔をしていた。

明らかな殺意を放っている須郷を止めた方がいいのは山々だが、見ていると対戦相手の二年生は須郷を圧倒している。

この状態で勝負を止めてしまうと、須郷のプライドがズタズタにさ

れかねないのだ。

まあ敗北してもズタズタになるのは目に見えているのだが……

何か対策をと二人の試合を視界に収めながら辺りを見ると、人垣の向こうに生徒以外の人の姿が二人見えた。

一人は黒いコートを羽織った茶色い短髪の男性。

もう一人は青い髪色の女性だ。

二人とも添って真っ直ぐこちらに歩いてきている。

二人とも明らかに生徒では無いし、教師にも見えない。

新島は二人を見た瞬間決闘を中止することを決めた。

防衛学校では学生同士の決闘を校則で禁止している。それは武力をもった学生同士が勝手に決闘などをして、重大な怪我を負わないようにするための措置でもあり、また外部の人間に防衛学校の生徒が安全な生徒であることを示すための措置でもある。

一般人からしてみれば、能力者は普通に化け物だし、護衛科の生徒ですらイフィムと戦えるだけの力を持った人間なのだ。それが暴力的であると思われれば、学校としては立場が悪い。

それを防ぐための私闘禁止だ。

迫ってくる二人がどんな人にせよ、今の状態は完全に校則違反だ。

このままでは、戦っている二人はおろか、それを止めないこの場の全員が罰則を受けかねなかった。

「二人とも！決闘は中止だ。部外者がこっちに向かってきている！」

永斗はその声を聞き、須郷の相手をしながら回りを確認する。そして二人が歩いてくるのを発見する。そして男のコートの中に剣が隠れているのも

しかし、須郷は怒りに身を任せただ剣を振るだけだ。

当然新島の声は届かないし、剣を止めようもしない。

永斗は須郷の突きに合わせて剣を絡め、そのまま須郷の剣をはじき飛ばした。

そしてもう一度鳩尾に蹴りを入れる。

しかし今度は剣を持っていなかったこともあり、両手で蹴りを防が

れた。

だが威力だけで何とか引き剥がすことは成功する。はじき飛ばした須郷の剣が地面に突き刺さった。

永斗の勝利だ。

だが須郷は尚も素手で永斗に殴りかかろうとした。

「須郷！もう終わりだ止めろ！」

新島が叫ぶが須郷は止まらない。

永斗は須郷の暴走を止めるため、切ることを決めた。

血を見れば少しは落ち着くだろうと考えたのだ。

なるべく跡が響かないように浅く脇腹を狙って水平に剣を構える。

そこに須郷が殴りかかってくる。

だが血が飛ぶことも、まして永斗が殴られることも起こらなかった。

「な！」

突然の乱入者に須郷は同時に驚く。その拍子に須郷は少し冷静さを取り戻した。

永斗は特に驚いた様子も無い。永斗には人垣を越え、黒コートの男が飛び込んでくるのは見えていた。

「君たち、防衛学校では私闘は禁止されていたはずだけど何をやっている？」

永斗と須郷の間には、先ほど人垣の先にいた黒いコートの男性がいた。

須郷の全力の籠ったパンチを片手で止め、永斗の剣を左手に持った刀で受け止めている。

左手だけでは止めれないと踏んだのか、刀は地面に刺さっていた。

「お前こそ何者だ？ここは部外者立ち入り禁止だぞ！」

須郷が焦ったように声を荒げる。焦っているのは、おそらく私闘をしていたことがばれてしまったことだろう。校則違反はそのまま成績に響く。

三期生トップなんて豪語しているのだから、現状は非常の望ましく

ない。

「俺はこのOBだよ。校長に呼ばれたから来たんだけど、グラウンドが妙に騒がしかったからね。それでこっちに来てみれば明らかに私闘が行われていた。しかも止めようっていう気配もあまり無かったから、強引に割り込ませてもらったよ。なにか問題だったかな？」

「いや、助かった」

永斗は素直に答えた。

「おかげで切らずに済んだからな」

そう言つて剣を鞘に戻す。

それを見て須郷は掴まれている手を振りほどいて下ろした。

OBはその行為を特に気にすることも無く、地面に刺さった刀を抜くと、コートの下に隠されている鞘にそれをしまう。

ちょうどその時、人垣が割れ、一人の女性が入ってきた。

OBの一緒に歩いていたのだから同じくOGなのだろうと永斗は辺りを付ける。

「終わった？」

女性はそれだけ呟いた。

「今收拾付けたよ」

「私闘にしては案外あっさりだったね？」

「実力の差が歴然だったからね。彼が完全にあしらってたし」

OBの視線の先には永斗がいる。

「へ」

女性は特に興味無さそうにうなずく。

「じゃあ行こっか。あんまり先生待たせると悪いしね」

「そうだな」

二人はそう言つたと再び人垣を割りながら真っ直ぐ校舎へ入って行った。

それを見送つた生徒たちの中に小さな波紋が生まれる。

「今の人つてもしかして七瀬さん？」

「七瀬さんってあの？」

「たぶんそうだと思う。オレ遠目にだけど見たことあるもん」

「マジかよ！じゃああのOBの人がガーディアンか？」

「エクスガーディアン佐藤さん！？」

「私エクスガーディアンって始めてみたかも」

「俺もだし」

喧騒は人垣の中で瞬く間に広がって行った。

そこにパンツと手が打たれる音が響く。音の発生源は新島だ。

「さあ、決闘は終わりだ！各自自習に戻るように！じゃないと教師が飛んでくるかもしれないぞ！」

それを聞いて、他の生徒たちが一斉に散らばってゆく。

椎名たちは永斗の元へと駆け寄った。

「永斗、大丈夫？」

「ああ、俺は問題ない。怪我ひとつ無いし」

「凄いね。ああも簡単にあしらっちゃうなんて」

「全くあんたは色々とおかしいわね」

皆で笑い合う仲、永斗はこっそりと須郷の様子をうかがう。

また怒りだしていきなり殴りかかってこないかの確認のためだ。

須郷はじつと永斗をにらみ続けていたが、さやかが寄ってくるとその場を後にした。

それを見てホッと一息つく。

そして思い出すのはOBのことだ。

「なあ今の人がエクスガーディアンだと思うか？」

「間違いないわ。依頼の関係で家に来てたのを何回か見たことあるの」

「そうだね。女性の方は海神七瀬さんだった」

「凄い仲よさそうだし、憧れるわね」

「そうだね」

文美と幸也が言うなか椎名はじつと永斗を見ていた。そして気づい

た。

永斗がもう一度小さく「あれがエクスガーディアン」と呟いていたのを。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2375x/>

イフィム。人間の世界は化け物に満たされた

2011年11月17日19時12分発行